

各地域の「実施報告書」

及び

各ブロックの「評価報告書」

1. 北海道圏ブロック

【1】～【3】

【1】実施報告書

取組名	「てんぽくツーリズム・ブランドの確立」に向けた基礎調査と社会実験	対象地域	北海道 (幌延町、天塩町、遠別町)
派遣伝道師名	篠原靖、政所利子	取組主体名	てんぽく地域活性化協議会
目標	<p>目的：「てんぽくツーリズム・ブランドの確立」～「観光」と「食」と「人」をテーマとしたツーリズム・マネジメント組織の設立～</p> <p>方針：1. 「観光」と「食」と「人」をテーマとした広域的なツーリズム・マネジメントの実施 2. 豊かな自然と日常的な活動をいかした地域連携・分野複合型観光の推進 3. 人材や技術といった資源をいかした安全・安心な商品の開発・販売の促進 4. 安全・安心な地域ブランドを支えるトレーサビリティ・システムの構築 5. リピーターを創造するファン・コミュニティの構築</p>		
期待	<p>ツアー開発(小規模・継続型・アカデミズム型)、安全・安心な商品開発(観光時の食やお土産が中心)を通じた地域のブランド化に取り組む上で、アドバイスや講演をしていただける伝道師の派遣を希望していた。特に、以下のパターンでの派遣を希望。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 事業進捗状況等を確認する「事業推進会議」の開催(3回)に併せた派遣 2. ツアー開発部会でのツアー実施(3～5回)に併せた派遣 ※ツアーを体験してもらいながらのアドバイスや、ツアーコンテンツ「旅の楽しみ方」の講師として) 3. 商品開発部会で実施予定の地元料理勉強会(地元宿泊・飲食業者等が対象で3～4回)に併せた勉強会の講師を兼ねた派遣 		
伝道師の活動状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 政所伝道師(10月12～13日：北斗荘(幌延町)) ①現地視察(12日)、②意見交換(13日) 2. 篠原伝道師(10月19～21日：遠別町) ①秋のツアーへの参加、②ツアー開発部会へのアドバイス 3. 篠原伝道師・政所伝道師(12月19日：天塩町) ①事業の中間報告の説明、②事業へのアドバイス、③天塩産品味比べ事業(商品開発部会)への参加・アドバイス、④トナカイフェスティバル(商品開発部会)への参加 4. 篠原伝道師・政所伝道師(2月26日：まーくる・札幌市) ①トレーサビリティ検討部会の活動成果及び予定の報告、②トレーサビリティ検討部会の次年度以降の活動予定の報告、③報告に対する伝道師からのアドバイス、④アドバイスを基軸とした意見交換、⑤てんぽくディナーへの参加 5. 篠原伝道師・政所伝道師(2月27日：まーくる・札幌市) ①前回(第3回)意見交換結果の確認、②てんぽく活性化協議会の活動成果及び予定の報告、③てんぽく活性化協議会の次年度以降の活動予定の報告、④報告に対する伝道師からのアドバイス、⑤アドバイスを基軸とした意見交換) 		
効果・成果	<p>○ 篠原伝道師からは、遠別ツアーに御参加いただき、段階的に取り組んでいく必要性などに関するアドバイスをいただいた。</p> <p>○ 政所伝道師からは、予算の使途や事務局運営をはじめ、マネジメントの重要性などに関するアドバイスをいただいた。</p>		
今後の課題	<p>地域活性化に向けたマネジメントの水準を段階的に高めるため、今回の事業を通じて検討してきた「活動母体となる組織の企業化計画(案)」をベースに、①地域活性化のビジョン(シナリオ)と、②(実験事業などを通じた実績のもと)今後必要となる費用を盛り込んだ収支計画(案)を整理し、その上で、③支援が必要な費目(初動期の単年度ではどうしても捻出できないものや、当初売り上げに比して大きなコストがかかり過ぎるが必要なものなど)に対しての直接支援や融資・税制などの間接支援などが柔軟に組み合わせることのできる仕組みづくりが課題である。</p>		
その他	特記事項なし		

【1】 ブロック 評価 報告書

取組名	「てんぽくツーリズム・ブランドの確立」に向けた基礎調査と社会実験	対象地域	北海道 (幌延町、天塩町、遠別町)
派遣 伝道師名	篠原靖、政所利子	ブロック 名	北海道ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまで「地方の元気再生事業」に基づき、てんぽく地域活性化協議会において「てんぽくツーリズム・ブランドの確立」を目指し、取組を実施していたが、ツアー開発に当たってのマーケット対象、費用の設定及び地域資源の磨き、並びに商品開発に当たっての関係者間の連携等が円滑に行われていないこと等が課題とされていた。 ○ 今回の取組は、特にツアー開発や安心・安全な商品開発を通じて地域のブランド化に取り組む上で、地域活性化伝道師の助言により、地域の人材力を強化するとともに、各々の取組の更なる活性化を目指すものである。 ○ 地域活性化伝道師の助言により、各々の取組の成果をあげるための適切な助言や取組状況に応じた柔軟な対応を行うよう、全体のマネジメントのあり方を見直した点、進捗状況の管理を徹底し、次年度以降の自立的展開に向けた取組の礎を築いた点は大きな成果であり、てんぽく地域活性化協議会の全体の事業成果を底上げする結果となった。 ○ しかしながら、依然として自立的展開が困難な取組もあり、これらについては次年度以降の活動のための調整役の明確化、事業の計画等を念入りに行い、本格的な展開に向けた継続的な取組を行うことが望まれる。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事業の進捗状況について、「次年度以降も取組が継続するためには、年度内で成果を出すことが重要である」との指摘がなされたことを受け、各々の取組が活性化し、特にトレーサビリティ検討部会の取組は町全体をあげての取組となった。 ○ 観光客を受け入れる側の基本的な姿勢の重要性を指摘されたことを受け、サービス向上の取組が自主的に実施されるようになり、その結果、地域内の観光資源の連携が構築されていった。 ○ ものづくり(地元の食材を活用したピタパンづくり)について、農産加工施設を導入し稼働する予定となっているなど、次年度につながる取組となった。 		
反省 点	特記事項なし		
今後 のフ ォロ ー ア ッ プ	<ul style="list-style-type: none"> ○ ツアー開発に当たっての地域資源の磨きやマーケティング等の助言 ○ 農山漁村交流を支援する補助事業等の情報提供 ○ 自立的展開に至った取組については、事業化に踏み出すための支援施策(企業に係る助言、金融・税制支援等)の情報提供 		

【2】実施報告書

取組名	中心市街地活性化基本計画策定に向けた発信力ある人材の発掘	対象地域	北海道旭川市
派遣 伝道師名	山下雅司、政所利子、古川康造	取組 主体名	北海道旭川市
目 標	旭川市においては、平成21年度から中心市街地活性化基本計画の策定に向けて取り組むこととしており、中心市街地活性化協議会を組織するなど体制を整備したところ。今後、調査を実施した素案の策定を経て、国との協議を開始するよう準備を進めるに当たり、地域の人材力向上による元気回復を目指す国のプランに基づき、地域活性化伝道師の招聘することにより、中心市街地活性化を担う発進力のある人材を発掘し、計画の実効性を高めることを目標とする。		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 山下伝道師：中心市街地の再生に向けて取り組まれた実績を基に、中心市街地における商店街振興や高齢者対応、求められる都市利便施設について、経験に基づく指導。 ○ 政所伝道師：中心市街地における新規開店、創業などが求められる中で、若手経営者に向けて地域との関わりの中でビジネスチャンスをつかむために必要な、地域を見るための視点やまなざしの持ち方について指導を期待。 ○ 古川伝道師：商店街再生の成功例として全国的に知られる高松丸亀商店街が取り込まれてきたエリアマネジメント方式による商店街全体の運営を実現させたまちづくり会社による施設運営や不動産証券化手法などの事例紹介などを期待。 		
伝道師の 活動状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 山下伝道師(H21. 10. 23) <ul style="list-style-type: none"> ○ 中心市街地活性化基本計画に向けた基礎調査を進めた段階で訪問いただいた。旭川市から中心市街地活性化基本計画策定に関わる市と商工会議所、商店街振興組合の職員が集まり意見交換した。市からの報告の後、中心市街地活性化基本計画をまとめる上での基本的な視点や課題、旭川らしさやアイデアなどお話しいただいた(参加者14名)。 2. 政所伝道師(H21. 11. 14～15) <ul style="list-style-type: none"> ○ 中心市街地活性化基本計画に向けたニーズ・シーズ調査を進めた段階で訪問いただいた。若手経営者らを集め、「人気のコト・モノ・ヒト」には、その訳がある」、「地域づくりと地域ブランド戦略」、「地域イズムと成長産業のポイントは…」をテーマにお話しいただいた(参加者12名)。 3. 古川伝道師(H21. 12. 22～23) <ul style="list-style-type: none"> ○ 商店街振興組合及び商店街PR担当者、市職員らで、中心部商店街を端から視察。その後、商店街の取組に至る考え方から成果までのお話しいただいた後、意見交換(参加者15名)。 		
効果・ 成果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 山下伝道師 <ul style="list-style-type: none"> ○ 「川をいかした都心再生が必要ではないか」、「北彩都地区と中心商店街をどうリンクさせていくのか」、「医療機関の充実をいかしてはどうか」、「昔の広域から全ての客層にオールマイティ対応する役割を見直す必要」との指摘をいただいた。これにより、旭川市の特性をいかした中心市街地活性化のポイントを明確にすることができた。 2. 政所伝道師 <ul style="list-style-type: none"> ○ 道内旅行のハブとなる位置、女性バーテンダーなどの旭川の魅力が存在している。これらを発信していくため、こうした見過ごしがちな価値への「気づき」に始まり地域経済活性化の工夫について、若手経営者等へのまちづくりの担い手としての意識の醸成につながった。 3. 古川伝道師 <ul style="list-style-type: none"> ○ 中心市街地活性化の意義を固定資産税の税収と合わせ地域経営の観点から、その必要性を説かれ、そのために土地の利用と所有の分離によるタウンマネジメントの導入が欠かせないことなど、新たな知見を得た。また、具体的な事例としての成功例の存在を知ることができ、地元商店街などにとって、活力を得た。 		
今後 の課題	地域での課題が共有化された以降、夢や目標を実現させるために、「思い」を持った人が担い手として主体的な行動をとっていくような動機づけや意識の高揚などの人づくりと、人と人のつながりが課題として浮かび上がってきた。		
その他	古川伝道師から、「これからの地方分権に、中心市街地の活性化は絶対に避けて通れない重要な課題。地域のこれからの存亡を握っていると言っても決して過言ではない。そのためには、まず地域の人々がこの課題をしっかりと認識しないことにはすべては始まらない。お役所はあくまで、ノーリクエスト、ノーアンサー。」とのコメントをいただいた。		

【2】ブロック評価報告書

取組名	買物公園再活性化プロジェクト ～ 全国初の歩行者天国の再生 ～	対象地域	北海道旭川市
派遣 伝道師名	山下雅司、政所利子、古川康造	ブロック 名	北海道ブロック
全体 総括	<p>○ 旭川市の中心市街地は、JR旭川駅から約1kmに渡って歩行者天国が続く買物公園(1972年開設の全国初の恒久的な歩行者天国)を中心に形成されている。今般、改正中心市街地活性化法の制度を活用するべく、中心市街地活性化基本計画の策定に向けた検討が、旭川市、中心市街地活性化協議会を中心に進められていることから、地域活性化伝道師を現地派遣することにより、関係者間の意識の共有、今後の取組の方向性等に関する助言等をいただき、地域ぐるみの取組として後押しすることができた。</p> <p>○ 地域活性化伝道師は、主に以下の事項について現地指導・助言を実施。</p> <p>① 中心市街地活性化基本計画の策定に向けた指導・助言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中心市街地活性化基本計画を策定するための基礎調査 ・旭川市の地域資源・特徴をいかしたまちづくり手法の検討 <p>② 中心市街地の活性化に向けた取組の推進に関する指導・助言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旭川市の地域資源を活かした地域ブランド創出等の研究 ・商店街活性化に向けた先進事例の手法等の研究 <p>○ 今後は、旭川市中心市街地の活性化に向け、更なる具体的な検討・調整が進み、意欲的な取組が進められることを期待したい。</p>		
奏功 した点	<p>旭川市の中心市街地は、モータリゼーションの進展や消費不況の影響を受け、賑わいが薄れている状況にある一方、当事者である商店街関係者、旭川市は危機意識を共有できていない状況にあったが、今回、地域活性化伝道師を派遣したことにより、旭川市のまちづくりに向けた方向性の共有、また、活性化に向けた先進的な取組手法の検討を行うことができたことは、今後、中心市街地活性化基本計画を策定・実施していく上で非常に有益であった。</p>		
反省 点	<p>今回、地域活性化伝道師と地域との間で日程調整が難航し、当初予定を大きく下回り、各伝道師を現地に1回しか派遣できなかった。</p>		
今後 のフ ォ ロ ー ア ッ プ	<p>旭川市は、平成22年度内での中心市街地活性化基本計画の策定を目指していることから、今後とも地域活性化統合事務局が窓口となり、事務局のコンサルティング機能を発揮した助言等を引き続き行っていくことが必要である。</p>		

【3】実施報告書

取組名	新たな地域資源「エミュー」を活用した網走市の観光活性化	対象地域	北海道網走市
派遣 伝道師名	玉沖仁美	取組 主体名	東京農業大学 オホーツク実学センター
目 標	網走市への観光入込客数増加のため、エミューに直接触れることのできる牧場や、エミューの肉、卵、脂を材料とする料理、菓子、石鹸・洗顔フォーム等、エミューを観光資源としても活用し、エミューとのふれあいや飼育体験をキーワードとする新たな観光ルートの策定、エミュー製品を活用した宿泊・レストランメニューの開発など、網走市の観光活性化のため産学官連携で取り組む。		
期 待	これまで、(株)東京農大バイオインダストリー(2004.4設立)では、エミューの飼育・加工・販売を手がけ、生どら焼き、スキンケア商品などを開発し、2008.7に「地方の元気再生事業」に採択され、エミューの飼育の実証試験や食品加工試験などを実施中。しかし、根本的に低迷する網走地域の観光の現状を踏まえ、どのような観点から観光資源の発掘、食材の活用方法、魅力ある旅行プランの策定、エミュー製品の売り方ができるのか、という点に関して助言いただくことを期待した。		
伝道師の活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1回意見交換会(2009.10.30) <ul style="list-style-type: none"> (1) 網走市の観光振興の目標をどこに定めるか → 宿泊数の増強、一人あたりの消費額増加 (2) ヘルス・ツーリズムの取組と可能性 → 「美容と健康」一般向けに分かりやすい (3) 宿泊施設における新たな観光商品の可能性 → 「温泉の効能を高める美」エミューオイルを使ったマッサージなど (4) 観光客のターゲットについて → アジア・中国人観光の北海道人気、道東観光 (5) エミュー商品(化粧品)の購買ターゲット → 価格設定、売り方の工夫 (6) エミュービジネスの将来展望 → まずは生産農家の拡大(5,000~10,000羽) ○ 第2回意見交換会(2009.12.10) <ul style="list-style-type: none"> (1) 食の視点からの観光振興 ※三重・湯の山温泉の(地産地消をコンセプトにキャンペーン) → 一人あたりの消費単価をあげる工夫 → 「言葉磨き」「アナウンス力」サービスの説明、お品書き、オプション商品の売り方 → 地域の食文化をいかした料理法(魚介類の歴史や物語、地元食材の強化) (2) 地域全体でいかに部屋を売るか → 地域レベルマネジメントの視点 → 魅力あるプラン化 (3) ヘルスツーリズムについて ※沖縄・宮古島の事例(景観をいかし「健康と美」を) → 網走は食のアドバンテージは宮古島より優れているのではないか (4) エミューの商品化について → 少量化による販売単価の低下(ペンシル型、使い切り型の容器を提案) → オイルを使ったエステ(ハンドマッサージやフットマッサージ) ○ 第3回意見交換会(2010.3.18) <ul style="list-style-type: none"> (1) 宿泊増強、魅力ある旅行プランについて → 旅行プランの商品化3原則(①発地②ターゲット③季節)、誘引資源と地域資源の使い分け (2) ヘルスツーリズムについて → 健康・インナービューティという視点で商品化 ※群馬・草津温泉の野菜スイーツ開発 (3) エミュー製品の新企画(羽根を使ったコサージュ)について → 食肉利用の見通し → 料理メニューの開発の視点(アンチエイジング) (4) 冬期間における観光振興について → 地域資源の発掘調査の手法 → 網走固有のオンリーワン・旅行プラン「海明けプラン」 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 網走市の観光振興に向けた魅力ある旅行プランやエミュー製品の商品企画について新たな取組が進捗しつつある。具体的には、行政では現在検討中の大曲湖畔園地へのエミューを用いた交流体験の企画提案、平成22年度事業として消費額増加のため網走の魅力を開発する「旅プランコンペ」の企画、首都圏をターゲットにした「落語ツアー」の企画に向け、準備が進行中。 ○ エミューオイルを用いたエステの商品化が市内のホテルとの間で進行中。 ○ 少量型の容器を用いた(ネイル化粧品)の試作品が完成し、商品化に向けた第一歩が進行中。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 上記の取組へと発展したことから、概ね成果は上げられたが、玉沖伝道師の助言にあった地域全体でいかにして部屋を売っていくかといった、地域レベルマネジメントの視点については、今後、更なる検討が必要。 ○ 今後、地域固有の資源(魚介類や農畜産物)を活用した体験プランや料理メニューの開発では、安定的な供給に向け、例えば農協や漁協との連携が必要。 		
その他	事務局・コーディネーターを大学が務めたが、構成諸団体との連携をもっと戦略的に行っていけば、さらなる取組の発展につながったのではないかと。玉沖伝道師からは、網走市は食のアドバンテージが高く、魚介類やエミューなどの地域資源を活用した料理開発についても、今後アドバイスしていきたいというお言葉を頂戴しており、今回の事業が今後ますます発展するものと期待。		

【3】ブロック評価報告書

取組名	新たな地域資源「エミュー」を活用した網走市の観光活性化	対象地域	北海道網走市
派遣 伝道師名	玉沖仁美	ブロック 名	北海道ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 網走市において、オーストラリアの国鳥であるエミューを新たな地域資源として活用し、地域内で生産・加工・販売を行う循環型ビジネスモデルの構築に向け取り組んでいるところ。他方、網走市への観光入込客数については、景気悪化等の影響により減少傾向にあり、宿泊客数増加に向けての対策を検討しているところ。本件は、網走市への観光入込客数の増加に向けて、エミュー製品を活用した宿泊・レストランメニューの開発など、新たな地域資源となりうる可能性のあるエミューの観光資源としての活用のあり方について、玉沖伝道師の助言を得て産学官連携で取り組むものである。 ○ 地域活性化伝道師により、地域資源の活用、他地域での成功事例、網走市全体の観光資源の魅力をいかに高めていくか等について、様々な指導やアドバイスを受け、産学官からなる地元関係者が連携し、エミュービジネスと網走市観光との連携、新たな商品開発等の動きにつながるなど、地元関係者の意識が大いに高まったことは評価できる。 ○ 今後は、エミュー製品等の域内での活用を通じたエミュービジネスの深化に加え、水産物など既往の地域資源との組合せ・再構成によって、新たな地域の魅力創出につながることを期待。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 以前は、東京農業大学等のエミュー関連事業の関係者と、網走市内観光業関係者が連携するということがほとんどない状況であったものの、今回の地域活性化伝道師派遣を契機に、これら関係団体らが情報交換・意見交換できる場の構築と醸成につながった。 ○ 地域活性化伝道師のアドバイスを受けて、網走市観光におけるエミューの活用について関係者間で協働し検討していく気運が高まり、具体的なプロジェクトとして網走市内ホテルにおけるエミューオイルを用いたエステの商品化検討や、エミューオイルの少量容器化製品の試作など、地域活性化伝道師によるアドバイスによって地元関係者が考え・動き・連携し、域内におけるエミュービジネスの裾野拡大が進むという効果があった。 ○ 網走市観光活性化全般について、地域活性化伝道師より示唆に富む指摘・アドバイスを受けるなど、地元関係者にとって有益な情報交換の場となった。 		
反省 点	特記事項なし		
今後の フォロー アップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今後、一定程度において自立的な展開が期待できると考えられるものの、エミューを活用した新たな観光商品・サービスメニューの開発に際して地元関係者が必要とする際には、地域活性化伝道師を派遣しアドバイスできる仕組み。 ○ 網走市内でのエミュービジネス構築・事業展開に向けた支援施策の情報提供。 		

2. 東北圏ブロック

【4】～【7】

【4】実施報告書

取組名	資源の「宝湖」・小川原湖 一次産品ブランディングと湖資源の活用で、100倍「行きたい！旨い！」と感じてもらおうプロジェクト	対象地域	青森県 (東北町、三沢市、六ヶ所村)
派遣 伝道師名	中澤さかな	取組 主体名	小川原湖漁業協同組合
目 標	一次資源のブランディングを中心とした資源活用法と、地元における「あるもの・できること探し」の進め方の取得。		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 具体的水産物のブランディング事例を基にした取組の指導 ○ 成功事例と失敗事例を交えた取組に関する助言。 		
伝道師の 活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ 関係者を集めた勉強会における「講演」とヨソ者視点での「地域資源掘り起こし」 <ul style="list-style-type: none"> ①第1回派遣(9月中旬) <ul style="list-style-type: none"> ・小川原湖の資源掘り起こし(湖での漁、周辺観光施設を視察) ・講演 「地域水産物の商材開発&販路確保について」 ②第2回派遣(11月下旬) <ul style="list-style-type: none"> ・小川原湖に関するアンケート結果分析 ・周辺道の駅利用者アンケート結果分析 ・講演 「商品開発の実例として低利用率・低価格魚種の有効活用について」 ・小川原湖の魚介類を使った料理(26品)の試食及び批評 ③第3回派遣(3月上旬) <ul style="list-style-type: none"> ・東北町 斗賀町長への取組説明 ・講演 「小川原湖の魚介類を活用した地域活性化の取組案について」 (地元飲食店、生産者等 約50名に対して講演) ・類似事例調査(鱒ヶ沢町役場、鱒ヶ沢漁協、海の駅わんど など) 		
効果・ 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地元関係者(生産者、飲食店、仲買人、自治体職員)が一同に集まり、小川原湖について議論する場が初めてできた。地元関係者がそれぞれの立場で前向きに取り組む気運が高まった。 ○ 9月からの実質半年間で予想以上に地元関係者の気運が高まり、伝道師からの助言をもとにした取組を実施する体制を構築できたことは、期待以上だった。 		
今後の 課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学んだこと <ul style="list-style-type: none"> ・産・官の協働体制が重要であること ・商品開発はプロセスが大事であること ・道の駅は重要な販売・情報発信の拠点であること ・地元で「小川原湖」自体が地域資源であることについて共有が図られていないこと ・「小川原湖」の魚介類を使った飲食店が不足していること ○ 現在の小川原湖に必要なこと <ul style="list-style-type: none"> ・しっかりとした組織(体制)づくり ・地元の「小川原湖」認知度向上 ・魚介類の地元消費拡大 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ ブランディングは一品、5年はかかる。急ぎすぎではダメ。 ○ 積極的なパブリシティ誘発により、広告費をかけずに注目を集めることが重要。 ○ 地元(県内)に喜ばれるプロデュースは、遠くから人が来ることにつながる。 		

【4】ブロック評価報告書

取組名	資源の「宝湖」・小川原湖 一次産品ブランディングと湖資源の活用で、100倍「行きたい！旨い！」と感じてもらおうプロジェクト	対象地域	青森県 (東北町、三沢市、六ヶ所村)
派遣 伝道師名	中澤さかな	ブロック 名	東北圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本取組は、全国有数の水揚げを誇る天然ウナギをはじめ、シラウオ、ワカサギ、シジミ、モクズガニ等の水産資源が存在し、「宝湖」とも呼ばれる青森県内最大の湖「小川原湖」において、これら一次産品の普及拡大についてブランディングを中心に検討するとともに、他の地域資源も見つめ直し、それらを効果的に活用することで、湖とその一次産品の認知度を向上させ、水産・観光の両面から地域の自立的発展を図るものである。 ○ 本取組の実施主体である小川原湖漁業協同組合は、小川原湖産シジミにトレーサビリティシステムを導入し、消費者の信頼確保、ブランド化等に取り組んでいるが、水産資源の消費拡大・販路拡大に課題が残っていた。そこで、道の駅「萩しーまーと」の駅長として実績を上げた中澤伝道師に、地域資源の発掘と活用方法について、下記のように3回にわたり実践的な指導・助言をいただいた。この指導・助言により、地元の「生産者」、「販売者」、「利用者(地元飲食店等)」の関係者の中で主体的に取り組む意欲を見せる者が相当増え、「宝湖活性化協議会(仮称)」の発足に合意する等の組織体制づくりも図られるなど、地域の人材力強化に対し、大いに貢献したものである。 ○ 今後は、今回の取組に参加した関係者を中心とした組織のもと、加工品、新しい料理のメニュー等の開発、イベント等のプロモーションなどの販売促進関係の事業等の展開が見込まれる。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中澤伝道師からは、商品開発のプロセスについての説明や、萩で実際に行った商品開発の事例紹介のほか、今後小川原湖で実施すると有効と考えられるイベントのプランの提示があり、当面は、地元での消費拡大、県内住民をターゲットとして考え、その後拡大するという将来ビジョンについての考え方が明確に示された。これにより、漁協に限られていた取組が、地元飲食店経営者や仲卸業者の賛同、地元自治体の首長等からの協力が見込まれる取組となり、宝湖活性化協議会(仮称)の発足が合意されるなど、地域一丸となった組織体制づくりが図られることとなった。 ○ 中澤伝道師から与えられた課題に取り組むことにより、地元住民についても地元の地域資源の存在や価値についての認識が不足していたことが明らかとなり、本取組に向けての関係者の結束が強まった。 ○ 中澤伝道師が現地指導に訪れ、同様の取組を開始した県内の他地域(鯉ヶ沢町)との意見交換も行われ、両地域間の連携・協力も今後図られることとなった(中澤伝道師による一貫した指導・助言が行われたこともあり、実施主体に特段の混乱は生じなかった。中澤伝道師が萩で同様の取組を行い、実績を上げていることもあって、非常に説得力があり、地元関係者に受け入れられやすかったことも成功の一因と考えられる)。 		
反省 点	特記事項なし		
今後 のフ ォ ロ ー ア ッ プ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今回の事業を支援してきた青森県(上北地域県民局)は、地元との協議により、今後地元で予定している加工品、新しい料理のメニュー等の開発、イベント等のプロモーションの実施については、引き続き中澤氏の助言が必要と考え、平成22年度については、県費で中澤氏に訪問指導を依頼することとなっている。 ○ 地域活性化統合事務局としては、今後の現地での事業展開にあたり、水産資源の品質保持、新商品開発、販路拡大などに係る国の支援施策について地元から要望があれば紹介するなどの支援は必要と考えられる(第3回目の訪問後も、地元の要望を受けて国の支援措置を紹介した)。 		

【5】実施報告書

取組名	花火とホテルの郷で都市農村交流の促進と新たな特産品の開発	対象地域	秋田県大仙市
派遣 伝道師名	横石知二、木村俊昭	取組 主体名	余目地域活性化対策いきいき 会議協議会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新たな特産品の開発、有機米「ほたる米」の販路拡大 ○ 農家レストランを開設し、余目地区にある家庭料理「一戸一輝」の料理を提供 ○ 花火祭り、ホテル鑑賞会、青空市場等を通じた都市農村交流人口の拡大 ○ 上記の取組を通じた、中山間地域のモデルとなる持続可能性ある取組(運営面、後継者育成等)への発展 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動を継続・発展させていくため、取組の方向性に関するアドバイス ○ これまでの活動の評価によって、地域住民の意欲を高めること ○ 外部からの視点による新たな事業の可能性や採算性の検証 		
伝道師の 活動状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 横石伝道師による現場視察・講演・個別相談実施(2009. 12. 10) <ul style="list-style-type: none"> ○ ビジネスを興すことのできるプロデューサーが必要 例：地域の実態をよく知り、愛着をもった若者(若手芸術家など) ○ 地域の特産品を売り出していく地域独自の仕組みをつくる ○ 女性の力を最大限にいかす(一戸一輝料理は大変価値がある) 2. 木村伝道師による現場視察・講演・個別相談実施(2010. 2. 11) <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の組織がしっかりしているのがいい → さらに、できるだけ多くの人が地域づくりにかかわるようにすることが大事 ○ 自分の地域に愛着をもつ子どもを育てる ○ 戦略性・将来性を見据えたまちづくりを → 農家レストランを開業する場合は、大学と連携することが大事 (秋田県内の大学やつながりのある千葉大等) 		
効果・ 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農家レストラン(農家民宿)開業の準備をスタート(3月内に開業許可を取得見込み) ○ 秋田市内に住む若手芸術家(画家)との連携 → 余目地区の風景画を作成。今後、余目地区のほたる米(特別栽培米)のパッケージに使用 → 若手芸術家のネットワークにより、余目地域への移住希望者や地域活性化のための活動仲間を募る ○ 交流実績のある西千葉の商店街関係者に、ほたる米の西千葉での試験販売の協力を依頼 → 西千葉関係者が運営するホームページ上でのインターネット販売を開始 		
今後の 課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事業の絞り込み及び人材や資源の集中的な投下(成功例づくり) ○ 大学や若者等をはじめとする外部との連携 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既存の直売所をいかす方策も検討すべき(横石伝道師)。 		

【5】ブロック評価報告書

取組名	花火とホテルの郷で都市農村交流の促進と新たな特産品の開発	対象地域	秋田県大仙市
派遣 伝道師名	横石知二、木村俊昭	ブロック 名	東北圏ブロック
全体 総括	<p>○ 大仙市余目地区は、5集落・107世帯・人口380人の4割が高齢者という地区である。当地区においては、平成16年4月、地域住民が地域の衰退に危機感を持ち、住民一丸となって地域の活性化に取り組むことを目的に「余目地域活性化対策いきいき会議協議会」を設立したところ。</p> <p>○ 平成17年より、「さくら花火鑑賞会」やホテル水路などを備えた自然観察公園等を整備、「ホテル鑑賞会」等を開催しているが、地域の担い手の高齢化や財政面の運営等において厳しい状況となりつつある。そこで、「休耕田を活用したソバやその加工品等の特産品開発」と「花火・ホテル等これまでの活動を連動させることによる交流人口拡大」の構想を具体化していくにあたって、地域活性化伝道師の助言・指導をいただくほか、それらの取組を端緒として、大仙市全域ひいては秋田県の中山間地域のモデルとなる持続可能性ある取組への発展を図る。</p> <p>○ 課題としては、既に協議会が組織されており、地域の人々のやる気は十分でありながら、ビジネスとなっておらず、すべての取組がボランティアベースで、継続性に欠けることが挙げられる。産直販売にも挑戦しているが、継続性ある規模のビジネスとなっていないのが現状であった。</p> <p>○ 横石氏、木村氏の両伝道師のご指導を踏まえ、適切に「経営」ができる体制の確立が図られたほか、地域資源の価値を見直すことによる情報発信の取組に着手することができた。</p>		
奏功 した 点	<p>○ 横石伝道師からは、「地域のもの(山菜や漬け物、おやき等)の価値を認識すること」、「全て地元でやるのではなく、ビジネスができる『店長』が必要であること」、「情報を発信するところに情報が集まるため、地域発の情報発信が必要であること」等の指摘を受けた。</p> <p>○ 木村伝道師からは、「戦略性・将来性を見据えたまちづくりを行うこと」、「大学との連携を適切に実施すること」、「地域に愛着を持つ子供を育てること」等の指摘を受けた。</p> <p>○ これを踏まえ、同地域では農家レストラン(農家民宿)開業の準備をスタートし、開業許可にこぎ着けることができた。</p> <p>○ また、地域の「経営者」となりえる人材を育成するため、秋田市内に住む若手芸術家(画家)との連携を進め、余目地区の風景画を余目地区のほたる米(特別栽培米)のパッケージに使用すること、若手芸術家のネットワークにより、余目地域への移住希望者や地域活性化のための活動仲間を募ること等の活動が開始された。</p> <p>○ さらに、戦略的な情報発信を行うため、以前より交流実績のある西千葉の商店街関係者に、ほたる米の西千葉での試験販売の協力を依頼し、西千葉関係者が運営するホームページ上でインターネット販売を開始するなど、地域一体となり、この戦略的な活動につながった。</p>		
反省 点	特記事項なし		
今後 の フ ォ ロ ー ア ッ プ	<p>大仙市余目地区における本取組について、制度上等のボトルネックに直面していないか定期的にフォローアップを実施する必要があるほか、これらの取組を他地域にも広げるため、中心市街地活性化制度、構造改革特区制度等の政策ツールを活用し、秋田県地域活性化担当部局とも密接に連携した、総合的なコンサルティング活動を継続的に行うことが必要である。</p>		

【6】実施報告書

取組名	地域の恵み「山菜・キノコ」を活かした新たな特産品の開発と、地元の天然わき水を活用した一升瓶地ビール等の販路拡大への挑戦	対象地域	秋田県由利本荘市
派遣 伝道師名	横石知二、木村俊昭	取組 主体名	道の駅「東由利」黄桜の里
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の恵みである「山菜・キノコ」をいかした特産品の開発 ○ 既存の特産品(ボツメキビール、生キャラメル等)の販路拡大による所得向上・雇用維持 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ プロの目から見た東由利特産品素材のピックアップ ○ 流通、価格、販路拡大、広告等に関するアドバイス <ul style="list-style-type: none"> → 地域内での販売活動から、全県、県外への販路拡大の方法 ・販路拡大における注意点や、意識を継続させて活動するためのノウハウ ・ボランティアではなく、売上げ利益を継続させていくためのアドバイス 		
伝道師の活動状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 横石伝道師による現場視察・講演・個別相談実施(2009. 12. 11) <ul style="list-style-type: none"> ○ 東由利にはキラリと光る特産品がある。売り方の工夫が必要 (漬け物やお菓子など1パッケージあたりの量を少なくした方がよい) ○ 地域の特産品を売り出していく地域独自の仕組みをつくる ○ 地域活性化のビジネスを興すことのできるプロデューサーが必要 (古い慣習を破れる、できない出口をもたない、特別なオーラをもった人) ○ 素材はあくまで3割。いかす力が7割。いかし方次第で人も商品も伸びる 2. 木村伝道師による現場視察・講演・個別相談実施(2010. 2. 10) <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域づくりは数人でやるのではなく、全員が関わり、一体感をもって取り組む ○ 人を引きつけるキャッチフレーズが必要 ○ 自分の地域に愛着をもつ子どもを育てる ○ 戦略性・将来性を見据えたまちづくりを <ul style="list-style-type: none"> → 所得を上げられるような具体的な戦略を立てる ○ 特産品の売り方 <ul style="list-style-type: none"> → 定期的に新商品を(新商品が出ないと消費者に飽きられる) → 「限定品」設定で顧客の購買意欲を高める 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 県とコンビニエンスストアとの包括協定の取組の一環として、仙台市内のコンビニ2店舗(㈱サークルKサンクス、㈱ローソン)に、東由利地域のアンテナショップ(特産品のワゴン販売)を試験的に設置。 ○ 地元産の米を原料にした手作りお菓子について、従来の量の半量バージョンを新たに作り、県内大学生の協力で新パッケージを作成 ○ 販路拡大をするために、組織づくりの重要性を知り、関係者への説明会を数回行い、「東由利特産品開発懇談会(仮称)」を立ち上げ、勉強会や報告会を開催。 ○ 直売所に野菜を出荷している婦人有志10名が、出荷管理に役立てたいとパソコンを習い始めた(横石伝道師の講話に刺激されたことによる)。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「作って売るだけ」というこれまでの観念からの脱却(綿密な計画を立てる) ○ 一つの商品ができて上がるまでのストーリー、こだわりなどを消費者への情報として活用 ○ 生産者(高齢者)にやる気を出させる工夫(社会での存在意識の高揚) ○ 販売戦略に不可欠なインターネット販売への参入 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンテナショップの取組における酒税法等の関係法律の整理 ○ 組織の立ち上げや活動の初期段階においては少人数でやるとうまくいく 		

【6】ブロック評価報告書

取組名	地域の恵み「山菜・キノコ」を活かした新たな特産品の開発と、地元の天然わき水を活用した一升瓶地ビール等の販路拡大への挑戦	対象地域	秋田県由利本荘市
派遣伝道師名	横石知二、木村俊昭	ブロック名	東北圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 秋田県由利本荘市東由利地域は、豊かな自然に恵まれ、山菜やキノコの宝庫である。また、地域の象徴「八塩山(やしおさん)」の麓の天然わき水を活用した「ボツメキビール」は、不純物がなく滅菌処理をしていないという特徴を有しているほか、一升瓶に詰めて売るというアイデアで、地元の道の駅においては常に完売状態である。また、地域特産のジャージー牛のミルクを使った生キャラメルやフランスガモの薫製など、特徴的な商品も多い。 ○ 同道の駅では、道の駅での販売のみでは頭打ちであるため、さらなる販路拡大が課題。 ○ こうした現状を踏まえ、地域活性化伝道師の助言・指導を得て、既存の特産品を全国メジャーな商品とするための販路開拓に挑むものである。 ○ 具体的には、地域の恵みである「山菜・キノコ」をいかした特産品の開発、既存の特産品(ボツメキビール、生キャラメル等)の販路拡大による所得向上・雇用維持を目標としている。 ○ 横石氏、木村氏の両伝道師のご指導を踏まえ、大学との連携、売り方の工夫、ICTの活用等、さらなる発展につながる活動が開始された。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 横石伝道師からは、「売り方に工夫が必要であること(パッケージを小分けにする等)」、「ビジネスを興すことのできるプロデューサーを育成するべきであること」等の指摘を受けた。 ○ 木村伝道師からは、「人を引きつけるキャッチフレーズが必要」、「大学との連携を適切に実施すること」、「所得を上げられるような具体的な戦略を立てる」等の指摘を受けた。 ○ これを踏まえ、同地域では仙台市内のコンビニ2店舗(㈱サークルKサンクス、㈱ローソン)に、東由利地域のアンテナショップ(特産品のワゴン販売)を試験的に設置し、新たな販路開拓に着手することができた。 ○ また、お菓子について、従来の量の半量バージョンを新たに作り、県内大学生の協力で新パッケージを作成するなど、大学と連携した新たな「売り方の工夫」を開始した。 ○ さらに、販路拡大のための組織づくりとして、新たに「東由利特産品開発懇談会(仮称)」を立ち上げ、勉強会や報告会を開催している。 ○ 加えて、直売所に野菜を出荷している婦人有志により、PCを活用した出荷管理の取組も着手。 		
反省点	特記事項なし		
今後のフォローアップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 由利本荘市東由利地区における本取組について、地域活性化伝道師の派遣により醸成された機運が維持されているかについて、秋田県地域活性化部局とも連携して定期的にフォローアップを実施する必要があるほか、他地域の道の駅の成功事例の紹介等、地域活性化統合事務局の持つノウハウ・知識を活用したコンサルティング活動を継続的に実施することが必要。 		

【7】実施報告書

取組名	粟島の宝を活かした観光交流プロジェクト	対象地域	新潟県粟島浦村
派遣 伝道師名	金丸弘美、中山勝比古、海津ゆりえ	取組 主体名	粟島ドリームランド協議会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 粟島には素晴らしい海の幸、山の幸があるが、全く商品化されていない。もう一度島の資源を見直し、商品化に結びつける。 ○ 同じ離島である日間賀島の島内の活性化や組織化の取組を学ぶ。 ○ 粟島では渡り鳥のオオミズナギドリを利用したエコツーリズムを実施しようとしているが、昨年は実験的に実施し、参加者から好評を得た。これから本格的に実施するに当たって村民にエコツーリズムとは何か、どのようなやり方が粟島に合っているのか学ぶ。 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 他地域の事例を紹介していただくこと、また粟島の現状や資源を視察していただき、どのようなものに商品化の可能性があるか、どのようなシステムで製造、販売していくのがいいのか。 ○ 同じ小さな島でどのような取組をして人口の維持、観光の活性化に繋がったのか、その方法、過程を知る。 ○ 全国の先進的なエコツーリズム事例を学び、どのような仕組みで実施するのか助言いただく。 		
伝道師の活動状況	<p>1. 金丸伝道師 → 初日に講演会、2日目午前中に島内視察、午後に意見交換会。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 食に関する全国の取組成功例として、山に茂る葉っぱや、郷土料理、一見無価値なもの、今までお金を出して処分等を頼むものに、今はお金を払ってでも食べたいという事例紹介。 ○ そのためにも地域資源の見直しが欠かせず、そのために「食のテキスト」を作成。食品の起源、自給率、品種、栽培法、栄養価その他詳細な情報をまとめ、食品に対する認識を深め、消費者の満足度を高める。 ○ 2日目の島内視察では、民宿を訪問し、家の方と懇談、郷土料理の試食。午後からは、地元協議会と意見交換を実施。島の食について様々な意見が出たが、共通して言えるのが、忙しくてする暇がない、とのこと。それに対しては民宿の様々な仕事、宿泊客の送迎など、分業して負担を減らす「分業化」によって解決できる。 <p>2. 中山伝道師 → 初日に島内視察と講演会、2日目に地区ごとで観光懇談会を実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 粟島の日間賀島の概要と現在に至る過程の紹介。共生の精神のもと漁協主導での市場作りや島内のハード作りなど、観光や漁業の両輪体制での利益循環の仕組みが印象的。大事なのは、自分たちのやっていることが島のためにもなっているという意識。 ○ 2日目は一般村民向けに観光懇談会を開催。山菜などの山の資源が土地境界の複雑さから商品化できない現状に対し、売り上げの数パーセントを地区のために収めるなど共生のルールを定め、パイの取り合いではなく拡大につなげる。 <p>3. 海津伝道師 → 初日に講演会、2日目にワークショップを実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 講演では、そもそもエコツアーとは何か、という初歩的な内容から4つの類型に分けた全国の事例の紹介、それによるエコツアーに必要な要素、最後に粟島でエコツアーを行うにはどのようにすべきかという内容。 ○ 2日目のワークショップでは、海津伝道師の司会の下、「エコツアーを作ろう」と題して参加者自身にエコツアーの内容を作ってもらった。参加者それぞれに粟島の「宝」を思いつくだけ挙げてもらい、それらを元にツアーを作成した後、発表、意見交換を行った。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「分業化」という考え方、日常ありふれたものに価値があるという事例に関心が高かった。参加者からは「それならこれもどうか」と様々なアイデアが出てくるきっかけともなった。 ○ 日間賀島は島というハンディが島を一つにしたということで、同じ離島として大変関心が高い話だった。粟島は、観光シーズンが短く冬は観光客は全く来ない、島ゆえに無理と考えるところがあるが、逆に「売りになる」と考える意識が参加者の中に芽生えたのではないかと。 ○ ワークショップは日頃参加者が思っていることを具体的な形にしたことで大変有意義。「こうすればできる」という成功のシュミレーションを味わうことができ、実施に向けてのハードルが少しは下がったのではないかと。 		
今後の課題	<p>一番の課題は組織化。現在、地元協議会が地域活性化に向けて活動しているが、委員それぞれの本業が忙しく活動になかなか専念できない。分業化による負担の軽減や島民自体の意識改革が必要。粟島は自給自足の島で、どの家も食材は自前でそろえているが、それが逆に足かせ。全てを自らの手でそろえることが膨大な手間であり、高齢化社会を迎えた粟島の村民には負担。そしてどの事業でも村民から言われる事は「どうせ他所の話」という冷めた目がある。島というハードは充実しているが、問題は我々自身がどうするか、ソフトの問題。</p>		
その他	<p>できるなら2回2泊ではなく、もう少し長期的な関わり方をできたらと考える。</p>		

【7】ブロック評価報告書

取組名	粟島の宝を活かした観光交流プロジェクト	対象地域	新潟県粟島浦村
派遣 伝道師名	金丸弘美、中山勝比古、海津ゆりえ	ブロック 名	東北圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 粟島浦村(粟島)は、2集落に366人が住み、70歳以上が人口38.3%を占める(H20)の村であり、このまま人口推移した場合、H30には人口325人に対し70歳以上が62.2%を占め、急激な高齢化が予想されている。 ○ 一方、島は資源に恵まれ、米を除くほとんどの食材が島内で調達できるが、各家庭が、民宿を営む傍ら、漁、畑仕事、山菜・海藻採りなどをすべて兼業で行っており、分業化は進んでない。 ○ 島の主な産業は、観光であり、島名物「わっぱ煮」や国の天然記念物として指定されている「オオミズナギドリ繁殖地」等を目的に、季節民宿を含めて約40軒の民宿に2万5000人が来訪(日帰りの食事も含む)するが、以前の離島ブームやバブル期と比べて観光客数が半減し、民宿の経営も全体的に厳しい状況。また、冬は本土と島を結ぶフェリーが欠航することがあり、観光客が見込めず、通年での現金収入が見込めないことも、若年層が定着しない原因の一つとなっている。 ○ このような現状に危機感を持ち、従来から粟島活性化協議会を組織し、島の魅力パンフレットの作成・配布、散策道の整備等を進めてきているが、よそもの、わかもの視点を活用した活性化を進めるため、緑のふるさと協力隊など島外の人材の呼び込みを積極的に行っている。 ○ 本取組では、この従来の活動に加え、食、観光、地域コミュニティ再生の専門家である地域活性化伝道師から具体的な助言・指導をいただくことで、島の魅力の再発見と活用方法、島の将来像等について島民自身が議論し、活動することにより、今後の持続可能な離島活性化モデルへの発展の端緒とすることができた。 ○ 課題としては、分業化が進んでおらず余力がないことに加え、一部の積極的な島民を除き、現状にとらわれて過去の努力も否定しがち、「よその事例だから」と否定しがちな意識の問題があり、今後いかに島全体としての協働意識を高めるかという点。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師からは、1月からフキノトウが採れる(春が早い島)、南北の魚が両方捕れるなど、島ではごく自然にある風景、食材にこそ価値があるという島の魅力の再発見とそれらの具体的な活用方法についてアドバイスがあった。 ○ 共同わっぱ煮会場を設けることによる朝食の一括提供や、布団の上げ下ろしアルバイトの活用など、人手不足を解消するための分業化のアドバイスがあったとともに、将来の本格的な分業化に向けて、各家庭の民宿、漁業、農業等についての収益分析を実施し、漠然とした分業化による収入源の不安を取り除く必要がある等の具体的なアドバイスがあった。 ○ 島民からも、伝道師の講演を踏まえ、これまで観光を主、漁業は従としてきたことについて、漁業の後継者がいなくなれば、おいしい魚を提供できなくなり、観光も衰退するという危機意識が示され、分業化した上で、観光業と漁業との後継者育成を含めた協業が必要である等の具体的な意見が出されるなど、島民の意識を変え、村が整備した加工場、直販場の活用方法とともに、島民自ら検討を進めていく端緒とすることができた。 ○ 既に島外から移住してきた「わかもの、よそもの」も今回の取組に積極的に参加しており、伝道師との意見交換を通じて大いに刺激を受け、彼らを中心として、分業化に向けて夏の観光シーズンのアルバイト共同受入や、島の観光シーズンの延長に向けて季節民宿から農林漁業体験民宿への転換について検討を始めるなど、具体的な取組が開始。 		
反省 点	特記事項なし		
今後 のフ ォロ ーア ップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本取組により、一部具体的な取組が開始されつつあるが、今後、持続可能な取組としていくためには、多くの島民の参加が必須であり、多くの島民がもつ「よその事例だから」という否定的な意識を徐々に前向きなものに変えていくことが必要で。島民に浸透し、ともに新しい取組について議論することができるよう、地域活性化の専門家に年間を通じて幾度と現地を訪ねていただくことが必要。 ○ 人材の派遣については、粟島浦村に対して「地域力創造アドバイザー事業」(総務省)を紹介した他、各種ボトルネックに直面していないかフォローするなど、総合的なコンサルティング活動を継続的に行うことが必要。 		

3. 首都圏ブロック

【8】～【10】

【8】実施報告書

取組名	多摩地域起業・経営人材育成モデル事業(仮称)	対象地域	東京都八王子市
派遣 伝道師名	富永一夫、木谷正道	取組 主体名	エイビット他
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 21年度は、「サテライトキャンパス(仮称)」を設立して運用確認すること ○ 22年度からの3年間で、同キャンパスで育成される企業人材・社会企業家を約3,000名 ○ 修了者に含まれる、サイバーシルクロード八王子のメンバー企業の後継者30人 ○ はちおうじ志民塾から育つ地域コーディネーター30人 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「地域人材」とは、どのような人材で、どのような分野で活躍し、どのようにして育成するのかを教えてください。 ○ 地域人材育成センターである「サテライトキャンパス(仮称)」に求められるものを教えてください。 		
伝道師の活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域にどのような人々が働き・学び・住んでいるのかを確認し、その課題を聞くよう促す。 <ul style="list-style-type: none"> ① 地域には、中小事業者が多く働いている。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 中小事業経営者の後継者育成 ・ 中小事業者の従業員の育成等々が課題 ② 地域には、高齢化社会に伴い多くのシニアが居住している。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 大手企業の男女ビジネスマンで地域を知らない人々が多い、この方々の活性化が必要 ・ 子育てから開放された女性達も多い、この方々の活性化が必要 ③ 地域には、大学生が多く居住し学んでいる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学生は、地域でのアルバイト、ボランティアやインターンシップを望んでいる ・ 留学生(特に中国を中心とするアジアの留学生)が多くいるが、地域との交流がない ④ 地域には、必要に応じて大学院で学び直しをしたい社会人が多く働き・居住している。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 八王子市だけでも23の大学があるが、社会人大学院は都心で開校しているのみ ・ 修士という資格がほしい訳ではなく、学びたいときに学びたい科目があることを望んでいる 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域活性化伝道師は、上記の活動から見えてきた課題を明確にするため、23名の地域人を紹介し、ヒアリングを促した。このヒアリングにより、課題が明確になっただけでなく、課題の解決策も見えてきた。 ○ 「サテライトキャンパス(仮称)」は、地域密着型人材育成センター「エイビットスクエア」として、平成22年6月1日に開所式を行うことになった。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「サテライトキャンパス(仮称)」の価値を最大化するという課題と解決策を、日常的に学び実践に結びつけていくことが重要。 ○ 今後の課題は、どのような「サテライトキャンパス(仮称)」を具体的に設立するかが課題。 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域には、中小企業の遊休資産と余剰人材が存在。その価値を地域貢献へ向けてもらえるようにすることが重要。 ○ 地域貢献に役立つことを認定できた場合の固定資産税の減免や、従業員をNP0に派遣した場合の税制優遇等が必要。 		

【8】ブロック評価報告書

取組名	多摩地域起業・経営人材育成モデル事業(仮称)	対象地域	東京都八王子市
派遣 伝道師名	富永一夫、木谷正道	ブロック 名	首都圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 企業家にとってより良い産業活動の場となるよう、新たなビジネス機会や新産業の創出をめざして活動する「サイバーシルクロード八王子」(協議会)、地域密着型の学生・社会人教育を標榜する多摩大学、八王子市・長池公園の指定管理者としてコミュニティマネジメント・まちづくり活動をリードするNPO法人フュージョン長池の三者が中心となって、地域を支えるビジネス人材の育成と人材交流、コミュニティビジネス等社会起業を目指す企業家の育成を現場で行うサテライトキャンパスを八王子市中心部に設け、同キャンパスを修了した人材が地域で就職・起業し、即戦力として活躍できるよう、継続的に支援するメンター(支援者)のネットワークを構築する。 ○ 本年度は準備期間であり、地域金融機関を含む地域人にヒアリングを実施することにより、サテライトキャンパスの設置・運用に向けた課題を整理することができた。 ○ 開設時期は明確になったが、本格的な取組はこれからという段階であり、今後の動きに注視する必要がある。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 4つの課題を明確にするために、地域活性化伝道師の人脈をいかした地域金融機関を含む地域人にヒアリングを実施することにより、課題の解決策が見えてきた。 ○ 「サテライトキャンパス(仮称)」は、地域密着型人材育成センター「エイビットスクエア」として、平成22年6月1日に開所式を迎えることとなった。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大きく4つの課題を整理してきているが、今後、取組を進める中で重点化を図るなど、メリハリを付けて進める必要があると考える。 ○ 伝道師の人脈を今後も継続的に活用できるような取組体制を構築していく必要がある。 		
今後の フォロー アップ	<p>財政的な支援の必要は薄いと考えるが、成功事例として確立していくようであれば、国として取組状況・経過等をホームページ等で公表・PRしていくことが重要と考える。</p>		

【9】実施報告書

取組名	行方交流圏協議会 エコツーリズム推進事業	対象地域	茨城県 (潮来市、行方市)
派遣 伝道師名	井上弘司、小椋唯一	取組 主体名	行方交流圏協議会
目 標	○ エコツーリズム・グリーンツーリズムのフィールドとしての評価を確立することなどにより、交流人口を拡大し、地域の活性化を図る。		
期 待	○ 農業地域という特性や、水郷潮来のあやめ、ホテル・旅館など、地域資源の有効活用方策 ○ 観光消費額の増大や雇用の拡大、地域経済の活性化につながるような提案や助言		
伝道師の活動状況	<p>1. 派遣状況</p> <p>① 地域の主要な施設を視察、講評</p> <p>② 市民や団体等との意見交換会を実施</p> <p>2. 指導・助言の内容</p> <p>① 視察後の講評では、施設等における取組の課題や改善点、地域の資源の活用方法、展開手法等について助言。</p> <p>② 意見交換会では、実例を紹介しながら、おもてなしは一人ひとりの心がけ次第であることや、団体等が抱える課題などへの対処法等について助言。</p> <p>3. 今後の取組を行う上での提案等</p> <p>① 教育旅行： 都内の小中学校を呼び込む。農業体験、民宿、既存施設の活用。</p> <p>② 農家民宿： ホテル誘致に匹敵する効果。農家との信頼関係構築が課題等。</p>		
効果・成果	<p>○ 外部の視点で、他の事例やデータや傾向等を示した説明を受けることにより、これまでの取組の改善や新たな取組のきっかけとなった。</p> <p>○ 従前の有識者による講演等とは異なり、伝道師からは具体的な提案や助言があり、意見交換会参加者から地域おこしへ意気込みの声が聞かれるなど、市民の機運醸成や意識改革につながった。</p> <p>○ 上記の市民レベルでの反響は想定外の効果であったが、提案に基づく具体の取組や事業化には至っておらず、また、改善等の助言の成果が現れるのはこれからという状況。</p>		
今後の課題	<p>○ 市民、団体、行政等が連携・協力して地域振興に取り組む体制づくり</p> <p>○ ワークショップや会議の開催など、市民や団体等の民間主導による地域の活性化、提案の実現</p> <p>○ 地域の活性化に主体的に取り組む、やる気のある市民等の取り込み</p>		
その他	<p>単年度事業であることから、助言・提案等を受けた段階で派遣事業が終了し、今後の取組計画の伝道師への提示や、実施等についてのフォローがないことから、事業化など次の段階での再派遣や、事業費の助成制度と組み合わせるなど、施策としての継続性がほしい。</p>		

【9】ブロック評価報告書

取組名	行方交流圏協議会 エコツーリズム推進事業	対象地域	茨城県 (潮来市、行方市)
派遣 伝道師名	井上弘司、小椋唯一	ブロック 名	首都圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 茨城県南東部に位置する行方地域は、潮来市、行方市の2市で構成される。古くから水運の要所として栄え、毎年6月に開催される「水郷潮来あやめまつり」は、全国に知られ、開催中は約60万人の観光客で賑わう。豊かな土地を有し、さつまいも、水菜、れんこんなど多様な野菜を生産し、近年は観光や商業と連携した商品開発・販売にも取り組んでいる。 ○ 行方交流圏協議会は、潮来・行方両市に茨城県と国交省霞ヶ浦河川事務所を加え、行方地域の豊かな水辺空間などの地域資源を活用した事業を実施し、地域間交流の促進、地域振興を図っている。これまで湖上体験・農業体験等のイベント、食をテーマにしたシンポジウムなどを開催。 ○ 今後、エコツーリズム・グリーンツーリズムの推進を図り、継続・発展的な事業化につなげるため、地域資源の活用と体験交流プログラムの開発を検討することとし、地域活性化伝道師との意見交換を行うこととした。 ○ 平成21年11月、12月にそれぞれ1回ずつ地域活性化伝道師による現地視察を実施し、本年1月には行方市・潮来市において、地域活性化伝道師と地元の観光・商工・農業関係者及び住民との意見交換会を実施した。 ○ 伝道師による現地視察により、地域資源の再発見や掘り起こしにつながった。意見交換会における伝道師からの成功・失敗事例の紹介により、今後の取組の方向性や柱のプロジェクトを検討するにあたっての課題が整理された。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 他の地域の活性化事例について知見の豊富な伝道師の視点により、地元の住民も見過ごしていた地域資源を再認識する機会が生まれ、また、全国での成功や失敗の具体例を提示することにより、既存の地域資源の有効活用や課題の抽出の手助けとなった。 ○ 地域住民と伝道師の意見の交換により、地域活性化のための取組を現在実施している、または地域活性化の意識が高い住民の新たな取組への機運が高まった。 		
反省 点	<p>伝道師による現地視察は、限られた日程の中で効率を優先して行われたが、伝道師からは、観光振興や地域おこしの現場の担い手や地域住民と意見交換を行う機会をより多く設けたいとの要望があった。</p>		
今後の フォロー アップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 意見交換を行った住民に、地域おこしへの機運醸成がみられたことから、今後、具体的な取組の実施や事業化につなげるため、地域におけるニーズ掘り起こしやボトルネック解消を図る。 ○ 特区・地域再生制度等の活用や、各省の関連施策について総合コンサルティングを行うなど、地域での人材育成及び地域活性化の取組を支援する必要がある。 		

【10】実施報告書

取組名	野木町地域資源開発事業	対象地域	栃木県野木町
派遣 伝道師名	白井純子、西田穰	取組 主体名	栃木県野木町
目 標	野木ブランドとしてふさわしいものの候補を検討委員会でまとめる。		
期 待	野木ブランドを推進していく方法の助言。		
伝 道 師 の 活 動 状 況	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1回(平成21年10月16日) <ul style="list-style-type: none"> ・ 野木町役場職員に、「野木ブランドの創出に向けて」と題して、白井、西田両伝道師の講演を受ける。 ○ 第2回(平成22年1月14日) <ul style="list-style-type: none"> ・ 「野木ブランド検討委員会」に指導者として参加され、「野木ブランドの掘り起こしについて」と題して、野木ブランド候補について検討。 ※「野木ブランド検討委員会」とは、町民から公募した委員を含む、町商工会役員、JA役員、農業生産販売関係者、消費者団体役員、社会福祉団体役職員からなる、主に野木ブランド候補を検討するための委員会。 ○ 第3回(平成22年2月15日) <ul style="list-style-type: none"> ・ 野木町内にある農産物生産者が経営する「矢畑農産物直売所」において、視察を行い、商品ポップ方法等を指導助言いただき、次に、中小業者が経営する「ミルクブロッサム」洋菓子店において視察を行い、指導助言をいただいた後、野木庁舎で行われた野木ブランド検討委員会では、「野木ブランドの掘り起こしについて」ワークショップを行い、ファシリテーターとして野木町の資源や潜在資源を発掘しながら、ブランドについて議論を深めていった。 		
効 果 ・ 成 果	指導・助言が行われる前までは、それぞれ個々の主張をしている傾向があったが、特に、ワークショップを取り入れて行った後は、向かうべき方向性が絞られてきて、これから委員会を行ううえで進めやすくなってきた。		
今 後 の 課 題	絞られてきた資源(ブランド候補)をどうやってまとめるか。		
そ の 他	町として、物(商品)を売りたいのか、「野木町」あるいは「地域」を売りたいのかの方針が必要。町のコンセプト作りが必要。		

【10】ブロック評価報告書

取組名	野木町地域資源開発事業	対象地域	栃木県野木町
派遣 伝道師名	臼井純子、西田穰	ブロック 名	首都圏ブロック
全体 総括	<p>「野木ブランド検討委員会」が発足し、野木町ブランドの創出についての検討に道筋がついてきたところである。具体的な成果はまだ出ていないが、何もないところから委員会を立ち上げ、道筋をつけたことは大きな前進ではあった。</p>		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 検討委員会を発足し、ブランドの検討に入ることができた。 ○ 統一感のなかった「ブランド」のイメージが、3回の伝道師派遣により、絞られてきた。 		
反省 点	<p>検討委員会が発足したばかりであり、具体的な方向性はまだこれからというところである。「ブランド」のイメージの共有化は一定の効果が図られたことから、今後は町民及び町職員が一体となって取り組んでいく体制の構築が重要である。そのためにも、今年度の地域活性化伝道師の指導を踏まえて、今後の進め方を明確にする必要がある。</p>		
今後 の フォ ロー ア ップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 来年度は、野木町が独自で取組を進めていくことになるが、隣接する古河市は地域資源の「蔵」を活用したまちづくりを進めているため、連携することにより、地域が一体となつての相乗効果を発揮できると期待する。このため、取組が具体化していく中で、国の支援メニューとのマッチングが求められている。 ○ 重要文化財であるホフマン窯の修復に対する補助金や募金を活用しながら、自己負担を少なくしていくような取組が必要である。 		

4. 北陸圏・中部圏ブロック

【11】～【12】

【11】実施報告書

取組名	金沢 Sweet PASS 事業	対象地域	石川県金沢市
派遣 伝道師名	古川康造、藤沢久美	取組 主体名	金沢市商店街連盟青年部
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の商店街には、まだ隠れた魅力が多く残されており、商店街連盟青年部で話し合った結果、その大なるものが「人(客)と人(店主)のふれあい」であった。他方、最近のスイーツブームも手伝い、商店街の中に「美味しいスイーツがある」と聞けば、場所の便、不便に関わらず、多くの人が訪れる傾向がある。 ○ そこで、この2点をうまく結びつけ、地域の隠れたスイーツを掘り起こすことで誘客を図り、「ふれあい」という商店街の魅力を再認識してもらうことが第1の目的。取組を進める中で、今後の商店街活動を担う青年層を育て、若手経営者同士の「絆」を深めることが第2の目的。 		
期 待	取組を進める過程において、若手経営者への意識啓発や商店街活動を活性化させる手法等について、伝道師の豊富な経験に基づく指導・助言に期待する。		
伝道師の 活動状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 古川伝道師(平成21年9月7日) → 商店街連盟青年部幹部、金沢市担当職員との初会合 <ul style="list-style-type: none"> ○ イベントは商店街の人脈を築き上げる手段にはなり得るが、イベント実施を自己目的化すべきではない。 ○ 少子高齢化による人口減少社会において、商店街が過去の隆盛を取り戻すことは不可能であるとの現実を知ることが必要。 ○ ブランドの出展誘致に血道を上げて都市間競争に走るのではなく、住む人のニーズを把握し、定住人口を増やすことが鍵となる。 2. 藤沢伝道師(平成21年9月14日) → 商店街連盟青年部長との初会合 <ul style="list-style-type: none"> ○ アンケート用紙を配布・回収するなど、顧客のニーズを捉える手法を取り込まないと売上増加にはつながらない。 ○ 地域に何が不足しており、顧客が何を求めているのかを知ることが先決。 3. 古川伝道師(平成21年11月30日) → 各商店街の理事長や若手経営者を対象とした勉強会 <ul style="list-style-type: none"> ○ 危機的状況を直視し、今後のビジョンについて共通認識を持ち、商店街が一つにまとまるのが肝要。 ○ 商店街の合意形成を容易に進める上で、コミュニティの醸成が必須であり、今回のイベントも商店主同士が絆を深めてネットワークを築き、リーダーを育てるための契機とすればよい。 		
効果・ 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師からの「商店街の現実を直視すべき」や「消費者ニーズを捉えきれていない」という厳しい意見があり、商売を行う上で当然のことであるにも関わらず、商店街連盟青年部内で厳しい現実に対する危機意識の共有や商店街の現状把握作業をこれまで行ってこなかったという問題が浮き彫りとなった。伝道師の指導・助言により、改めてこのような認識を共有することができ、若手経営者同士のつながりを深めることができた。 ○ 単に売上増加を目的とするのではなく、このような取組を来年度以降も引き続き行い、若手経営者の中から活動の主体となるリーダーを育て上げることを決定した。 		
今後 の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ HPの維持管理費を負担するため、参加店の売上動向を考慮し、負担金を徴収することも検討 ○ 参加店を増やすため、各商店街に地域の隠れた名品・名物の調査依頼を実施 ○ 今回の取組に限定したスイーツ製造を参加店に依頼 		
その他	各商店街の理事長クラスと若手経営者間で課題を共有し、商店街が一体となって解決に取り組むことに、今後の世代交代も含めた商店街の将来が左右される。		

【11】ブロック評価報告書

取組名	金沢 Sweet PASS 事業	対象地域	石川県金沢市
派遣 伝道師名	古川康造、藤沢久美	ブロック 名	北陸圏・中部圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 取組主体である青年部にとって、国と市がバックアップして行う初めての取組ということもあり、事業が軌道に乗るまで多少時間がかかったが、何とか年明けのバレンタインシーズンに合わせスタートすることができた。取組の柱に「絆」をテーマとしておいていることから、マスコミへの露出は極力避け、口コミや人的ネットワークのみに頼った出だしとなったことにより、当初は反響も少なかったが、最近になりスイーツパスの申請も増えてきている。 ○ 今回の取組により、商店街の青年層全てが商店街の危機的現状や今後の行く末を共有できたとは言いがたいが、これまで通りの商店街活動への疑問が生まれていることは確かである。また、青年層の中にはまちづくりや商店街活動への意欲を強く持っている人材も存在し、このような思いを商店街連盟の中でしっかりと受け止め育てていくことが大切である。 ○ しかし、未だに商店街連盟本部と青年部、理事長と若手経営者間の意思疎通がうまくいっているとは言えず、今回の取組の中でも、この点が事業の実施時期の遅れや事業内容の変更等につながったことは否定できない。 ○ 今後、活動の主軸となるであろう意欲のある若手経営者の人材育成や、やる気のある商店街へ人と金を集中投資することによる活性化モデルの構築など、収束する社会の中で商店街に何ができるのか、そして何をなすべきかを商店街連盟で真剣に議論することが求められる。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 古川伝道師の「人口減少社会において商店街が過去の隆盛を取り戻すことは不可能であるという現実」は、取組主体である青年部に大きな衝撃を与えた。各々に危機意識を芽生えさせ、青年部の結束を強めたと思われる。 ○ 「商店街の中で何かをやり遂げるためには、日頃からのネットワーク・絆づくりが大切」という助言は、青年部のこれまでの取組を正当化し、今後の活動意欲の高まりに貢献した。 ○ 藤沢伝道師の「地域ニーズの積極的な収集」は、基本的であるがゆえに足下を見失いがちであった商店街への適切な助言となり、地域の結びつきをより一層強く持つことへの意識啓発につながった。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人材力事業における伝道師派遣は、地域の主体的な取組に対し伝道師が指導・助言することで問題解決等の糸口やきっかけを与えるものであり、あくまでも取組主体の積極的かつ自発的な行動が求められることを強く認識させる必要がある。この点に関し、今回の取組の中で、伝道師に安易に答えを求める場面や伝道師の考えが伝わりきらないこともあった。 ○ 伝道師リストには伝道師が多数存在するが、個々の伝道師に関する情報量が少ないため、どの伝道師が今回の取組にマッチングするかなど、伝道師の選択に苦慮する面も見られた。 ○ 取組主体より藤沢伝道師との協議を強く求められたが、伝道師の多忙により、希望通り協議の機会を設けることができなかった。 		
今後の フォロー アップ	<p>取組主体より来年度以降も継続して事業を実施する旨の回答があった。その際、女性の視点を重要視していることから、地域活性化応援隊派遣相談会等を活用し、地域振興や商店街振興等に実績のある女性の伝道師を派遣し、取組を指導することも有効である。今回の取組を一過性のものとして終わらせないためにも、各々の自発的な行動を引き出すことが大切であり、そのためには伝道師による継続的な意識啓発や助言が求められる。</p>		

【12】実施報告書

取組名	竹材の新たな手工品による事業化と地域活性化	対象地域	富山県富山市
派遣伝道師名	政所利子、竹田純一、木村乃、小出宗昭	取組主体名	自眼舎 南部治夫
目標	竹根の器づくりが呉羽丘陵周辺地域の特産として認知され、地域の他の取組と共に行政や民間企業を含めた連携によって地域の活性化をすすめる機関の設立を旨とする土壌づくり。		
期待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 政所伝道師： 地域資源の活用と事業化について地域ブランドづくりの戦略と手法について ○ 竹田伝道師： 地域活性化のためのネットワークづくりとして協議会の立ち上げについて ○ 木村伝道師： 地域文化の創造と持続的な発信について組織マネジメントについて ○ 小出伝道師： 里山再生に向けた自立・継続した事業展開として初期事業化について 		
伝道師の活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ 政所伝道師には、講義と意見交換を行い、主に地域ブランド創出における戦略と手法、地域資源の発信についてのポイントを伺った。 ○ 竹田伝道師には、講義と意見交換を行い、主に連絡協議会づくりに関して立ち上げから運営までの様々な留意点について伺った。 ○ 木村伝道師には、講義と意見交換を行い、主に協議会やNPO等の組織運営に関する留意点や地域文化の創造と発信の手法について伺った。 ○ 小出伝道師には、これまでの事例紹介と意見交換を行い、主に地域資源による事業化における戦略と戦術について伺った。 		
効果・成果	呉羽丘陵各地域で活動している取組団体の内容について、市や県など行政機関に詳しく知っていただく最良の機会となった他、各伝道師の派遣によって、当地の各取組の課題や問題について、解決方策を参加者の皆さんで色々と検討できたのは貴重な経験であり、今後の交流や連携についての本格的に話し合うきっかけになっていくものと期待。個人としては、「呉羽丘陵地域活性化連絡協議会」を母体として参加いただいた取組団体と共に広く連携を図り、新たな「公」としての機能を果たして里山再生を進めることを、当行政機関に提案していく所存。		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 県や市の行政機関からも御出席いただいたが、今後どのようなカタチで誰が呼びかけをして地域の連携を図っていくのかという肝心の課題について、県や市と一緒に答えを出すに至らず、伝道師から一方的に勉強させていただくだけにとどまった、という感がある。 ○ 個人としては、自分が進める自眼舎の法人化も未だ実現できず、正直なところ、地域の事も私自身の事も現実の一步として成せてないところにいささかの焦燥感がある。地域の連携の関わりを大切にし、竹根の器が「呉羽丘陵再生の象徴」となるようにと、このプロジェクトを受けたが、伝道師派遣を通じて私自身の取組にそのような声が上がったかについては、残念ながら、あまりそれが多少なりとも感じる事ができなかった。 ○ 結局のところ個人としてのやるべき事は、今後も地域の関係を図りながら、なんとかして竹根の器づくりを進めるのみ。地域の活性化を考えるのは、やはり自分の竹根の器づくりがちゃんと軌道にのり、地域にしっかりと認知され、いろいろな連携が成されていく過程の中で、一つ一つ手法が見えてくるという、このようなプロセスの重要性を改めて再認識するに至った。 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ できれば、受け入れる側にも、最小限の実費分だけでも予算付けをしていただきたかった。これから自分の取組を事業化できるかどうかの初期段階であるため、地域の連携も同時進行しながらというのが多少、任の重い役であった。「地方の元気再生事業」の中で、竹根の器を使った食事会やお茶会の開催、懇談会の開催など、地域に広める事業に予算付けいただき実施してみたかったという思いがあったため、今回の伝道師派遣においても、自分では事業化を確実にできず、上記の伝道師派遣のお手伝いぐらいしかできず誠に申し訳なく、残念に思っている。 ○ しかしながら、この富山市呉羽丘陵の活性化について、伝道師派遣によって多少でもその考えるきっかけになったことだけは確信している。 ○ 受入れ側の行政機関としては、富山市の公園緑地課より毎回の伝道師派遣による懇談会の手配・準備の全面的な協力と参加・出席をいただき、県からも観光地域振興課の2回の参加・出席をいただいた。また、担当いただいた内閣官房地域活性化統合事務局の方々には毎回富山入りいただき、最終総括として改めて本年2月に出向いていただくなど、大変お世話になった。この場を借りて、感謝申し上げたい。 		

【12】ブロック評価報告書

取組名	竹材の新たな手工品による事業化と地域活性化	対象地域	富山県富山市
派遣 伝道師名	政所利子、竹田純一、木村乃、小出宗昭	ブロック 名	北陸圏・中部圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 富山市呉羽丘陵地域では、地域に自生する竹を活用した手工品づくりを地域産業の一端とし、地域の活性化につなげようとする取り組みや竹林整備や環境美化活動等に取り組むボランティア団体、地域のエコツーリズム等に取り組む者や養蚕に取り組む者、ピオトープを作り虫を生息させようとする地域住民等、様々な取組の担い手がいるものの、個々の取組や事業は非常に小規模であり、各々の今後の展開等是不透明な状況である。 ○ このような中、地域活性化伝道師により、「地域資源の事業化における戦略と手法」や「地域の担い手等の協働や連絡協議会づくり」など、様々な指導や助言を受け、「地域の担い手等による協議会」を発足させ、今後の呉羽丘陵地域における事業や取組につながりを持つだけでなく、行政とも連携を図れる組織として参加した地域の担い手等が、それぞれ協働する気運が高まってきたことは評価できる。 ○ 今後は、「地域の担い手等による協議会」が、「官」だけでもない「民」だけでもない役割を持った「地域の新たな公共」として呉羽丘陵地域の活性化につながることを期待したい。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまで互いに連携していなかった地域の担い手等や関係団体等が情報交換できる場となった他、県や市の担当者と地域の担い手等との意見交換の場ともなり、担い手同士のつながりや官民との連携に向けて一定の成果があったものと思われる。 ○ 地域の担い手等も、当初は各々の取組の事業展開を中心に考えていたが、回を重ねる毎に地域の取組として協働する気運が高まってきたことも評価できる。 		
反省 点	<p>地域活性化伝道師を交えた懇談会や総括としての意見交換会を開催したが、常に参加する者が地域の担い手の一部にとどまってしまう、呉羽丘陵地域の多くの担い手等に広げることができなかった。</p>		
今後 のフ ォ ロ ー ア ッ プ	<p>地域の担い手等の要請により、今後も必要に応じて地域活性化伝道師を派遣してフォローアップできるようにする必要がある。</p>		

5. 近畿圏ブロック

【13】～【15】

【13】実施報告書

取組名	びわ湖と山の恵みを利用した、「地元産業・地元観光・地元教育」沖島3本柱活性化プロジェクト	対象地域	滋賀県近江八幡市
派遣伝道師名	斉藤俊幸、中山勝比古	取組主体名	株式会社 日吉
目標	漁業が中心であるにもかかわらず、琵琶湖の水質悪化・外来魚問題による漁獲量の激減、島人口の大幅な減少と高齢化に直面している。沖島活性化を目指し、廃棄処理の対象となる外来魚を原材料としたペット向けの食品販売を構築するとともに、現在は埋没している資源を、観光地資源・教育資源への利用活用へとつなげる。		
期待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 外来魚を用いたペットフードの製造工程の整備及び産業構築のノウハウ伝授 ○ 農商工連携を活用した地域づくりのノウハウとPR手法の伝授 ○ 地域資源を利用した今後の進む方向性・考え方の整理手法 		
伝道師の活動状況	<p>1. 斉藤伝道師 (H21. 9. 22～23)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 外来魚の乾燥、商品化を目指している。自作の乾燥機はよくできているがうまく乾燥できていないため、何度も試作を重ねる必要。機械の改良点としては、熱源の強化をする前に乾燥容量(体積)を減らしてはどうか。 ○ 魚の乾燥のみで形を残すのは、見栄えが悪い。荒めの破碎をした後に乾燥してはどうか。 ○ 環境会社である日吉が、例えば椎茸の取れる林業地の整備を大学生と協働して行うことや、薪燃料の活用、水質保全、外来魚の駆除・活用等の循環型地域づくりに積極的に取り組むことも重要なテーマではないか。 ○ 漁協に隣接した冷凍庫が空いており、ここで芋焼酎を造ってはどうか。 ○ 地域再生に関しては、外部人材の受入、確保は効果がある。 <p>2. 中山伝道師 (H22. 3. 18～19)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ お客様をもてなす意識が必要。日間賀島では皆で出迎える形を取っている。それは、島にお客様が来ると、島が潤うことを理解しているから。 ○ 漁業者のプライド、漁業の価値＝琵琶湖の浄化・生態系の維持に貢献していることを理解し、今後の活動を行うことも重要。 ○ 都会に「商売・お客様の接客等」を勉強しに出た若年層を戻す仕組みが必要。潰れることが分かっている、戻ってくる人はいない。 ○ 来島者が増えれば、仕事が増える(=収入も増える)子供が残りやすい環境になる。 ○ できない理由を並べるのではなく、出来るためには何をすべきかを検討すること。 ○ 循環型の漁業を目指す。沖島でとれる天然の魚の付加価値を高める為、地産地消を進める。第一弾のキーワードは、「うなぎ祭り」として、余所に流せば、2,000円でも島で消費すれば10,000円になるかもしれない。 ○ 「限定商品」として販売すれば、希少価値も上がり付加価値も付けやすい。 ○ 特定の者が儲けるのではなく、島全体が潤う仕組みを作らなければ長続きしない。 ○ 料亭の料理を出すのではなく、島独自の方法で調理し、屋台形式でお客様に味わってもらおう。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 乾燥効率向上のために、乾燥機に間仕切りを行い、2畳から1畳にタイプを変更して行った結果、飛躍的に効率が向上した。熱源強化にとらわれていたので、大きなヒントとなった。 ○ ミンチにする発想から、スティックタイプにすることへ発想を変え、小型犬・猫にも食べることが可能となった。 ○ 焼酎を作成する案をいただいたが、今年度は対応できなかった。しかし、「お酒」の製造がヒントとなり、次年度の活動として検討を進める。 ○ 漁業レストランを今後の計画に盛り込んでいたが、まずは簡易方法で行い、実績を積み重ねていくこととして計画変更を行う。 ○ 日間賀島と同じような境遇であり、魚を使った町おこしの説明が分かりやすく、「うなぎ」以外を使用した町おこし案も複数できた。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者が多いこともあり、行動力が弱い。大学などの連携や地域起こし協力隊等を視野に入れ行動力の強化を行う必要がある。 ○ 地元の資源(強み)を整理した上で、外部に意見を確認し連携する(=視野を広く持つ)。 ○ 観光船を受け入れるのであれば、観光滞留時にお金を落としてもらえるような窓口のプログラムづくりは積極的に行う。 ○ 屋台形式で料理を振る舞う為の許可がおりるのか。可能な形を模索する。 ○ PRとお客様の確保の手段。 ○ 来島者の受入対応のマニュアル整備など。 		
その他	特記事項なし		

【13】ブロック評価報告書

取組名	びわ湖と山の恵みを利用した、「地元産業・地元観光・地元教育」沖島3本柱活性化プロジェクト	対象地域	滋賀県近江八幡市
派遣伝道師名	斉藤俊幸、中山勝秀古	ブロック名	近畿圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 沖島は琵琶湖の中で人が住んでいる、世界的にも非常に珍しい島であり、歴史的価値もあるものの、主要産業である漁業が漁獲量の減少により低迷するとともに、人口流出や高齢化の問題もあり、このままいくと無人島になる危惧が生じている状況である。 ○ この取組は、島にある資源により地元産業・地元観光を活性化させるとともに、地元教育に活用できる島にしていくことにより、島を活性化させ、人が戻ってくるような誇りを持てる生活ができる島を目指すものである。 ○ 伝道師の助言等により、現在島にある魚資源等の掘り出しが行われた。それらの資源を手のつけやすいところから活用し、少しずつ実績が出て活動に自信が持てつつある状態となってきた。具体的には、作成したホームページで沖島の魚資源を加工したものを販売するとともに、沖島の魅力や沖島の活動を対外発信するようになっている。 ○ しかし、このような活動は必ずしも島の人すべてが賛同しているわけではなく、実績を積み重ねて大きな結果としていくことで賛同者を増やすことが望まれる。また、島を担う若手の発掘・育成も急務であり、それが今後大きな課題であると考えられ、島の人々の活動により島が活性化していき、魅力ある島になっていくことでこの課題をクリアしていくことが望まれる。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先が見えず何から始めればよいか分からず、それゆえ行動もためらいがちであった島の人々が、地域活性化を成功させ、地域に収益を生んだ伝道師との会談により、具体的に手をつけることが明らかとなり、自信とやる気が出てきたことが、最も大きな成果であると思われる。 ○ 今後、島の将来を見据えた、将来世代の育成も含めた経済活動を行っていく必要があるが、そのための戦略的思考や、助言・助力が得られるネットワークが構築されつつあることも大きな成果であると考えられる。 		
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 結局、2名の伝道師が各1回ずつの派遣と、派遣回数が少なかったことが挙げられる。 ○ ただ、派遣月は9月・3月と、派遣月が離れており、その間に島の方々が伝道師の助言をもとに自ら行動し、ちょうど次へのステップへ進むタイミングで2回目の派遣が行われたため、大きな成果が得られたように思う。少ないながらもタイミング良い派遣により、結果的に良かった。 		
今後のフォローアップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現在は活動指針等をまとめる中心人物が島外の人であるが、将来的には若手の島内関係者が中心となって活動指針をまとめていくようになることが望まれる。 ○ 課題に直面した場合の助言・助力が得られる更なるネットワークの構築が求められる。事務局としても適切なフォロー・情報提供を行っていく。 		

【14】実施報告書

取組名	山と街の架け橋「木のおもちゃ」で 森林再生	対象地域	兵庫県
派遣 伝道師名	木本圭一、井上重義	取組 主体名	木づかい推進協議会
目 標	森林の再生を図り、地域の活性化に寄与するため、山と街の交流を促進し、身近な暮らしの中で子供から大人まで利用できる県産木材製品のひとつとして、スギ、ヒノキを使った木製玩具(積み木)を開発・製作するとともに、製品パッケージとブランド構築、マーケティング、広報活動、メディア戦略を確立する。		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 開発しようとする製品及び活動について、専門的見地から外部評価してもらい、欠落している事項の指摘、指導を通じて実効性のある地域、組織の活性化につなげたい。 ○ 幅広い考え方、人材の交流を通して、地域活性化や環境貢献など消費者に対してアピール力のある製品を自主的に開発・プロモーションができる人材を育成したい。 		
伝道師の活動状況	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%; border: 1px solid orange; border-radius: 10px; padding: 5px;"> <p>木本伝道師 (関西学院大学)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産官学連携の具体的な事例。 ・学の参画がもたらす相互メリット。 ・商品開発過程に「学」を組み入れた仕組みの提案。 ・学生プロジェクトプランコンペへの協力 ・学生交流祭典2009への参加。 ・関西学院大学聖和キャンパスでの実証活動へのコーディネーター。 ・学との連携提案。 </div> <div style="width: 35%; border: 1px solid yellow; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>産官学連携への提案、効果、可能性(9月)</p> <p>↓</p> <p>「木の玩具」の歴史と現状(10月)</p> <p>↓</p> <p>ひょうご森の祭典(11月)</p> <p>↓</p> <p>産官学連携の具体的な活動提案と「木の玩具」の歴史とグローバルな実態(11月)</p> <p>↓</p> <p>学生交流祭典2009打合せ 学生交流祭典2009参加(12月)</p> <p>↓</p> <p>関西学院聖和キャンパス打合せ(1月)</p> <p>↓</p> <p>総括及び次年度活動計画(3月)</p> </div> <div style="width: 30%; border: 1px solid lightblue; border-radius: 10px; padding: 5px;"> <p>井上传道師 (日本おもちゃ博物館)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欧州を中心とした「木の玩具」の歴史。 ・玩具産業の現状。 ・代替材の脅威。 ・低価格路線。 ・多様な形状、彩色が遊びの可能性を拡げる。 ・木製玩具市場の厳しい現実。 ・木製玩具を販売するには広報と普及啓蒙活動が必須。 </div> </div>		
効果・成果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 組織の活性化について <ol style="list-style-type: none"> ① 商品としての可能性と現実的な課題について情報共有ができ、組織として一体感が出てきた。 ② 山と街の交流イベント参加者や伝道師から、一定の支持を得たことで取組が盛り上がった。 ③ 関西学院大学教育学部に木製玩具を試験提供し、教育的な効果を実証するという短期的な活動内容が具体化したことで、組織として本取組への期待が高まった。 ④ 産官学連携の取組の可能性を得て、活動の幅に広がりが見え、意見交換が活発化した。 2. 製品の完成度の向上・バリエーションの拡大 <ol style="list-style-type: none"> ① 長さ・形のバリエーションを増やすとともに、異業種(繊維会社)の染色技術を活用した色のバリエーションを増やす試みを実施し製品の完成度が上がった。 3. 人材の発掘・育成 <ol style="list-style-type: none"> ① 開発意欲が高まり、パッケージングデザイン等の新提案が協議会内で議論されるようになった。 ② 関西学院大学教育学部への木工教材の提供など、木材取扱業者らしい協力を行う意欲が出てきた。 4. 山と街との交流イベント <ol style="list-style-type: none"> ① ひょうご森のまつり会場、学生交流祭典会場において、アンケートや聞き取り調査により、住民や学生の製品(積み木)に対する評価や暮らしの中に木材を取り入れることの意識等を把握 5. 製品化 <ol style="list-style-type: none"> ① 地域活性化伝道師のアドバイスにより、ブラッシュアップされた木製玩具(積み木)を作成 		
今後の課題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開発する木製品が山(生産地)の自然環境を向上させることを、分かりやすく消費者へ伝える仕組み(ホームページの開設、ロゴマーク・キャッチフレーズの作成)の構築 2. 木製品の開発とリンクしたソフト(普及啓発)の取組 3. 匂いやデザインなど生産者側が気がついていない木製品の魅力を発掘する仕組み 4. 地域間交流や産官学交流の担い手となる人材の発掘・育成(関西学院大学との連携協定を締結予定) 5. 市町レベルでの地域行政との連携 6. 積み木以外の木製用品の製品化・商品化 7. 山側とのさらなる連携 		
その他	特記事項なし		

【14】ブロック評価報告書

取組名	山と街の架け橋「木のおもちゃ」で森林再生	対象地域	兵庫県
派遣伝道師名	木本圭一、井上重義	ブロック名	近畿圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 取組主体は、「商品開発・製作に対するアドバイス」や「事業全体を通じたマーケティング及びメディア戦略のノウハウ」の助言を期待しており、今年度の取組目標として1商品の開発と提案(合計2商品について検討・開発)を掲げていた。木製玩具を商品開発するという具体的な目標と、森林の再生や地域の活性化に寄与するための次なる商品開発の検討という二つに取り組むため、木製玩具、産学官連携に知見のある伝道師から助言を仰ぐこととなった。 ○ 木製玩具に詳しい井上传道師からは、欧州を中心とした木の玩具の歴史や木製玩具の市場がどのような厳しい現状にあるか等、木製玩具の形状や色づけなど商品開発に対してアドバイスいただいた。 ○ 産学官連携において知見のある木本伝道師からは、学生参画のイベントに参加してアンケート調査や情報発信することでお金をかけずにマーケティングを行うこと、大学発のエコへの取組で県産木材の利用を検討することや、関西学院大学教育学部にて木製玩具の教育効果を実証実験する等、当初予想もしなかった新たな商品への発見や検討の方向性が生まれた。 ○ 取組主体が独自に考えていた製品について、その道の専門家である伝道師から認めてもらったり指摘を受けたことや、繊維業界との異業種連携、学生や住民からの意識調査を実際に行ってみる等、活動を通じて取組主体のやる気を刺激・活性化する良い機会となった。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師へ助言をいただく際、「何を」「どのように」「どうすれば良いか」ということを取組主体と事前に調整し、取組主体の意識と伝道師の助言がスムーズにつながるよう心掛けた。相談内容によって派遣する伝道師との意見交換会を別々に設けたり、内容によっては複数の伝道師を同じ会議に派遣し、異なる視点からアドバイスをいただく等、臨機応変に伝道師を派遣できたことは取組主体にとって大変良かった(伝道師はそれぞれの専門分野で活躍されている方ということもあり、個人によって考え方が異なる部分がある。複数の伝道師を同じ会議にて助言をお願いする場合、意見が同じ方向なら問題はないが、異なる助言をいただく恐れもある。その辺を上手く調整できた)。 ○ 産学官連携の一環で、関西学院大学教育学部に木製玩具を試験提供し、教育的な効果を実証するという副産物的な取組が生まれ、伝道師の影響で思わぬ波及効果があった。 		
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師も取組主体も限られた時間の中で意見交換や現地調査を行うこともあり、事前の調整が非常に重要となる。旅費書類の作成等、事前調整以外にも色々と作業があり、手間取ることが多かった。これを効率的に行うことができれば、もっと伝道師を派遣することができ、より多くの助言をいただける機会を創出できたかもしれない。 ○ 半年間の人材派遣事業だけで、取組主体が「成果を挙げる」「目標を達成する」ということを目指したため、取組主体の最終目的ないし長期的な目標よりも、短期の目標に集中し過ぎたのではないかという懸念がある。 		
今後のフォローアップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 専門家を派遣することによって、事業を行う取組主体やその地域が活性化することについて、劇的な変化とまではいかないが、伝道師の助言によって商品開発が後押しされたり、「学」とのつながりを持つようになったりと、事業が色々な要素を巻き込みながら進んでいく様子が面白く、今後の展開が楽しみなものとなった。 ○ 今後も取組を支援していくためには、新たな商品開発や教育効果の検証についてヒトだけでなくカネの面においても支援が必要と考える。各省の補助金等施策で支援できる分野や取組がないか事務局として適切なフォローや情報提供を行うことが必要。 		

【15】実施報告書

取組名	白浜町地域(観光)資源の棚卸しと活用の検討	対象地域	和歌山県白浜町
派遣伝道師名	玉沖仁美、清水慎一	取組主体名	白浜元気再生ワーキング会議
目 標	<p>○ 関西を代表する観光地・白浜における昨今の宿泊旅行者数の低下は、観光事業者のみならず、町の産業全体に先行きの見えない暗い影を及ぼしている。「目玉となる観光資源(温泉、海水浴、パンダ)のみに頼っている観光地」に強い危機感を抱き、今後の地域間競争を生き抜き、さらに発展・飛躍するためには、産業や組織の枠組みを越えて、オール白浜で新たな魅力づくりを行わなければならないと考えた。</p> <p>○ その端緒として、我々の足下に存在しながら、今まで殆ど気に留めなかった地域(観光)資源を見直し、市場ニーズにあった打ち出し方をするための方策等について検討し、実行に向けた青写真を作成することとした。</p>		
期 待	<p>地域が「売れる」あるいは「売りたい」とする素材が、実際には「売れなかった」ケースが多々ある。それは、その素材が市場ニーズにマッチしていないのか、あるいは売り方がまずいのか、発信者側の視点だけでは分からない。全国のような事例をよく把握し、分析されている伝道師の方々に受信者側の立場でアドバイスを期待した。</p>		
伝道師の活動状況	<p>○ 今年度3回(9/2、10/12、2/8)の派遣を受けた。</p> <p>○ 第1回は、資源の棚卸しをするにあたっての留意点と方法(ワークショップ)についての指導。その際、伝道師から「白浜は地域資源の宝庫」と言っていたことに自信を深めた。</p> <p>○ 第2回は、ワークショップでリストアップされた素材をアドバイスいただいた様々な論点に基づき整理し、その上で、目指したいゴール(目標)をどこにもっていくのかについての指導。また、地域資源を最大限に活用するためには、地域が主役の着地型観光を目指さなければならないとの提案を受けた。</p> <p>○ 第3回は、地域資源を全国に発信していくに当たっての他地域の具体的取組事例の説明を受けるとともに、今後、我々の取組をステップアップさせるために必要な事項についての助言。</p>		
効 果・ 成 果	<p>○ 伝道師の的確な指導により、資源の棚卸しについては、系統立てて整理することができ、どの資源をどのように押し立てていくのがベターなのか、また、そのために解決しなければならない課題等がよく見えてきた。</p> <p>○ 特に白浜産の銘茶「川添茶」については、この会議における検討が発端となり、町を挙げてのブランド化の取組に発展している。</p>		
今 後 の 課 題	<p>○ 多くの「種」を見つけることができたが、このワーキング会議では、それを発芽させ、育てていくための具体的な方策まで踏み込んで検討できず、伝道師に個々の具体的な助言を受けるまでに至らなかった。その原因として、ワーキング会議構成員を組織を基本に選定したので、機動性が悪く、議論にも限界があったことが考えられる。</p> <p>○ 今後は、組織ではなく、意識の高い個人を基本としてワーキング会議を実施していく。</p>		
そ の 他	<p align="center">特記事項なし</p>		

【15】ブロック評価報告書

取組名	白浜町地域(観光)資源の棚卸しと活用の検討	対象地域	和歌山県白浜町
派遣伝道師名	玉沖仁美、清水愼一	ブロック名	近畿圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 関西圏で圧倒的な知名度を誇る白浜温泉だが、首都圏の認知度は低く、集客は伸び悩んでいる状態であった。また、豊かな観光資源を抱えながらも、関係団体の連携が十分でなく、有効活用できていないことも課題とされていた。 ○ 今回の取組は、新たな観光プログラムの造成や次世代の人材を育成することで、地域観光産業の持続的かつ発展的振興を目指すものである。 ○ 伝道師の助言の下、参加メンバーによる観光資源の棚卸しや取りまとめ作業を行い、新たなブランド商品の発掘に結びつけることができた点は大きな成果といえる。また、多様な主体者が集まってこのような会議を持ったのは初めてのことであり、旅館組合だけでなく県・町といった自治体や商工会関係者も毎回会議に出席するなど、組織を超えて連携を図ろうとする姿勢も評価すべき点である。 ○ しかしながら、その他の観光資源の具体的活用についてはまだ道筋が見えないものが多く、観光都市としてのイメージ形成や目指す方向はクリアになっていない。組織間の連携についても、地域一体で取り組むきっかけにはなったが、今後更に発展的な取組とするには、まとめ役として活動の中心となる人材の育成や今回メンバーに入っていないなかった団体との連携も必要。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観光資源の棚卸しにより、地元観光資源の整理と再発見につながった。 ○ 伝道師は、観光地における「食」の重要性を指摘。これまであまり注目されてこなかった白浜産の銘茶「川添茶」のブランド化を推進するきっかけになった。 ○ 本取組は、これまで連携が不十分とされていた関係団体が組織を超えて話し合いの場を持つ契機にもなった。会議には、今後の白浜観光を支える若手の出席もみられ、次世代の人材育成にも一定の成果があったものとする。 		
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 短期間での取組であったため、個別の事案について具体的プランを描くまでは至らなかった。事前準備やメール等での情報交換を密にするなど、効率よく計画的に取り組む必要があった。 ○ 制度上、派遣できる人材に制約があるため、より効果的な人材を状況に応じて派遣するといったことができなかった(例えば、食のアドバイザーとして料理人を派遣するなど)。 		
今後のフォローアップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 着地型観光の推進、関西圏外(首都圏や海外)からの集客増加を図るためには、インフラ整備(特に、バス等の二次交通の充実)が重要であり、制度面・資金面でのバックアップが望まれる。 ○ 規制等により現行制度で対応できない場合は、新たな特区提案も視野に、事務局として適切なフォローや情報提供を行うことが必要。 		

6. 中国圏ブロック

【16】～【19】

【16】 実施報告書

取組名	おかやまさんさんエネルギー増殖プロジェクト～エネルギーの地産地消によるまちづくり～	対象地域	岡山県 (備前市、岡山市、瀬戸内市、赤磐市、和気町)
派遣 伝道師名	北野尚人、中村哲雄	取組 主体名	備前みどりのまほろば協議会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 備前みどりのまほろば協議会が目指す持続可能な社会に向けて、自然エネルギーや省エネを進めるにあたり、地域レベルにおける自然エネルギーへの受容度の向上を図る。 ○ 地域協議会に参加している市民並びに行政に対して、「町づくりは『ないものねだりではなく、あるもの探し』だ」というような気付きの場を提供する。 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会的受容を向上させるためには、マーケティング、ブランド化、メディア戦略など、広報関連について様々な知見が必要であり、その分野に関する専門的知識や先行事例の経験を有している北野伝道師に、広報についての様々な角度からの助言・指導を期待。 ○ 元町長として、人口8,000人足らずの葛巻町で、ミルク、ワインと自然エネルギーを武器に多くの方々の観光や視察等に呼び込んでいる経験から、どのような町を作っていくのか、どのようにPRするのか、中村伝道師からの助言・指導を期待。 		
伝道師の活動状況	<p>1. 北野伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 8月26日：・地元協議会、備前グリーンエネルギーの事業内容について説明。 ・懇親会を開催し、協議会の関係者が参集。本事業のキックオフを実施。 ○ 9月8日：・地域の問題整理・プレスト(商品提案・商品開発) ・他組織への協力・連携に向けて ・コンテンツチェック、次回検討、市内見学 ○ 10月8日：・普及戦略・出口戦略について ・先行事例レクチャー ・国庫補助金等活用、ファンド等の紹介 ○ 1月17日：・今年度事業の大まかなおさらい ・来年度事業に向けての提案 <p>2. 中村伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 8月25～26日：・中村伝道師の活動状況(町長時代、各講演等)について情報交換。 ・「食と農・林・畜」シンポジウムにて講演(参加者約100名) ・地元協議会、備前グリーンエネルギーの事業内容について説明。 ・懇親会を開催し、協議会の関係者が参集。本事業のキックオフを実施。 ○ 10月21～22日：・ESCO事業実施箇所の見学 ・カーボンオフセット商品の開発コンセプト、商品開発、販売チャネル等協議。 ・備前市職員研修(「職員のやる気で地域が変わる!」)を実施(約70名参加)。 ・NPO法人カワイレを対象に、ミニ講演会を実施(約30名参加)。 ○ 1月14～15日：・瀬戸内市長と会談、意見交換 ・瀬戸内市職員研修(「職員のやる気で地域が変わる!」)実施(約70名参加)。 ・「備前市かんきょうひろば」(エコロジー東備、地元協議会、備前市共催)にて講演会を実施(約70名参加)。 ○ 3月24日：・岡山市職員研修を実施。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 北野伝道師：本事業の性質、意味づけについて改めてコメントいただくことにより、事業の効果や見え方などを把握することができた。チラシやポスターに関するデザインについては、協議会にはデザインディレクターの専門性を持つ者がいないため、委託したデザイナーへの適切な指示ができなかったが、伝道師の指導によって改善された。 ○ 中村伝道師：備前市、瀬戸内市、岡山市の職員向けの研修を開催し、地球温暖化問題に対して、行政としてどのように取り組んでいけばいいのか、数多くのヒントを気付く機会になった。伝道師の熱意が伝わり、行政マンの仕事のモチベーションアップにもつながった。現在瀬戸内市と協議の上、「チャレンジ25地域づくり事業(環境省)」の提案書を作成中。地域協議会における活動が継続できるように、取り組んでいく。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 他組織の方との議論を経て、ジャンルを越えた方々との対話、交流、そして連携が、活動の幅を持たせることを痛感するとともに、新聞、テレビ等地元メディアとの関係性については、これまで以上の密度の濃い関係性を持つ必要があると感じた。デザインディレクションやブランド化については、今後も課題であることから、多くの広告やマーケティングの現場を見る、聞く、話すなどして、自分たちのものとする必要があると考える。 ○ 限られた予算の中で行政を運営していくことは、民間企業と同様であり、お金がなければお金を集める仕組みを考え、設備への導入費用がかかるのであればそれを減らすためのアイデアを出して実現していくことが大切である。地域協議会では、行政の財政負担が少ない形で、自然エネルギー導入拡大に向けて取り組んでいきたい。 		
その他	<p>次年度以降、太陽や森林をいかす活動に対して基金造成と広報展開を実施するような、新たな提案を伝道師からいただいている。事業として進められるよう、議論を積み重ねたいと考える。</p>		

【16】ブロック評価報告書

取組名	おかやまさんさんエネルギー増殖プロジェクト	対象地域	岡山県 (備前市、岡山市、瀬戸内市、赤磐市、和気町)
派遣 伝道師名	北野尚人、中村哲雄	ブロック 名	中国圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本取組は、平成21年度「地方の元気再生事業」にも採択された取組であり、それと併せて地域の人材力の強化を図ることによって、相乗的に良い成果をあげることにつながったといえる。具体的には、マーケティング・ブランディングを専門とする北野伝道師の派遣により、チラシ・パンフ・ロゴの作成といった自然エネルギーのブランディング事業については、デザイン知識を持つ一部の人に任せるのではなく、ロゴの持つ意味、使用方法などを備前みどりのまほろば協議会のメンバー全員で共有し、戦略的に考えていくことの重要性を認識できた。 ○ 行政の立場から地域おこしを実践した経験をもつ中村伝道師の派遣により、地域住民・事業者・行政が、お互いどのような視点から取組を進めなくてはならないか、財源に頼らず一人一人が問題意識や改善意識を持ち実践することの大切さを各主体が学ぶことができた。 ○ 地域の家庭や企業において自然エネルギーの利用拡大を図るためには、本取組の中心である備前みどりのまほろば協議会が、引き続き取組内容を幅広く情報発信してだけでなく、地域の家庭、企業、行政職員の一人一人がまず今できることを身近なところから始めていくという意識を持つことにより、地域に根付いた継続的取組になることを期待する。 		
奏功 した 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本取組を進めていく上で曖昧なイメージであった部分について、問題点や課題を浮き彫りにし、今後の取組の方向性に具体的な道筋を立てることができたと考える。例えば、ブランディング事業においてロゴを作成することについても、ただデザインが優れたものを作れば良いというだけでなく、ロゴの持つ意味や使う場面、対象とする世代や使用媒体に応じてどのように使っていくのか、メンバーが情報を共有しておくことの重要性を認識することができた。今後の戦略的な広報を行っていく上で、メンバーの意識も変わり大変意義があったと思われる。 ○ 具体的な事例や成功体験を伝道師から学ぶことで、協議会のメンバーだけでなく、地域住民や行政職員の一人一人が主体的に取組に参加し、他力本願ではなく、「まず自分達で何ができるのか」ということを考える機会となり、持続可能な地域づくりに取り組むきっかけや、それぞれのモチベーションを高めることにつながった。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人材力強化に向けた伝道師派遣は今年度が初めてだったこともあり、最初の段階で綿密に内容を詰めきれず、取組を進める中で当初想定していなかった派遣内容やスケジュールとなった。これはやむを得ないことではあるが、派遣内容に変更が生じる場合は、できるだけ早急に伝道師に情報を伝え、調整を図る必要がある(今回このことで問題が起こったわけではないが、派遣を行う際には、十分注意する必要がある)。 ○ 地域の取組に対して、伝道師に前向きに関わっていただくためには、取組主体と伝道師の間に一体感が醸造されるよう工夫して進めていくことが重要である。 		
今後 の フ ォ ロ ー ア ッ プ	<p>本取組は、ある程度自立して事業を展開できているため、総合的な支援ではなく、今回の伝道師派遣事業のように、課題となっている部分にピンポイントで対処できるような支援や、または先進的な環境分野の取組を行っている自治体等との横の連携を繋げるような支援(メーリングリストなどによる情報共有・情報発信ネットワーク)を行うことが必要だと考える。</p>		

【17】実施報告書

取組名	大山パークウェイを座標軸にした地域の魅力アッププロジェクト	対象地域	鳥取県、島根県、岡山県
派遣 伝道師名	岩佐吉郎、小出宗昭	取組 主体名	NPO法人 大山中海観光推進機構
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大山パークウェイのマーケティングの手法や大山の着地型の旅行商品の開発、事業化についての方向性を見極める。 ○ 大山パークウェイエリアの観光客数を増加(年間を通じた観光客の入り込み数を増加)させるため、大山パークウェイの取組(滞在型、体験型の長期滞在をターゲットにした商品の造成や継続的なキャンペーンなど)を、多くの方に知っていただく必要があるが、このための手法や具体的な事業化についての方向性を探り、実施していくことが目標。 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大山パークウェイの魅力はどう組み立てていけば効果が出てくるのかについての助言・指導 ○ 外部からの視点で、大山パークウェイの魅力(資源)についての客観的な評価 ○ 魅力(資源)を磨いていく手法についての的確な助言 ○ 地元の関係者が助言などをいただくことによる、モチベーションのアップ 		
伝道師の活動状況	<p>1. 岩佐伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 3回訪問いただき、現地視察(9/24、12/12)、大山パークウェイの中心メンバー(NPOスタッフ、自治体担当者)との意見交換会(9/25、12/12、2/26)を実施。 ○ 現地視察(大山パークウェイのポイント)では、その資源を確認いただき、その見せ方、プログラム化について助言いただく。また、観光関連の様々な取組(広域の観光推進協議会の事業、情報発信等)について外部からの視点で助言いただく。事業は何をもって成果とするかという問題では、地域のストック(人材が育っている、いい町(街)になっている、いい取組になっている～これらがうまくつながっている)がどう積み重なっているかということで評価されるべきとし、目先の数字だけで評価されるべきでない。観光行政がぶれないことも大切。また、様々な取組が進められるが、それを地域の関係者、市民が共有化する「努力」を惜しんではならないと助言いただく。 <p>2. 小出伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 3回訪問いただき、現地視察(9/13)、大山パークウェイの中心メンバー(NPOスタッフ、自治体担当者)との意見交換会(9/13、11/21)、関係者30名参加によるミニ講演会(2/27)を実施。 ○ 現地視察(大山パークウェイのポイント)では、その資源を確認いただき、その磨き方について、具体的な助言をいただく。3回とも一貫して、地域産業活性化の視点でヒントを提供いただく。「地域活性化は箱物を造ってもダメで、いかに人を前向きな気持ちにさせるかが鍵をにぎる」と助言いただく。問題点ではなくセールスポイントを発見する。既成概念、常識にとらわれない。消費者ニーズに合わせる。コラボレーションによる商品開発。メディアを効果的に利用するなど、成功のポイントを指南いただく。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の魅力の見せ方、作り方、表現方法など、全国の成功事例を交えてアドバイスいただき、観光の進め方(視点)についてその方向がクリアになってきた。 ○ 具体的な事業化に向けて、成功事例を交えてアドバイスいただき、戦略、戦術の大切さ、またその組み立て方について重要なヒントを得ることができた。 ○ 事業が活性化するには一定の規則性があることに改めて気づかされ、期待通りのものとなった。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観光活性化は、なにより来訪者に“大満足”としていただけることが大切(いわゆる“満足”のレベルでは大きなリピートが期待できない)ということで、それを実現するシナリオを描き、演出することが求められるということを改めて認識できた。今後は物語、シナリオ、演出・・・舞台演出のような手法を取り入れることが重要な課題。事業は全て、シナリオを描いて組み立てることが課題だと確認。 ○ ニュースリリースなどをきちんとしていくことで、徹底して話題づくり(的を射た)をし、その後の展開もきちんとフォローすることが課題。 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「地域の人材力強化」ということで、地域にとっては大変ありがたい事業であった。当初は目指すところが分かりにくかったが、意見交換を進めることで、問題点を浮かび上がらせることができた(意見交換は有効な手段)。 ○ 地域活性化伝道師のこれまで取り組まれた中での成功事例などは、実に刺激的で、参加者のモチベーションが上がったことが大きな収穫であった。 ○ 短期間かつ回数も少なかったこともあり、伝道師が地域のことについての詳細な事情まではわからないこともあって、一般論的な話を中心になってしまうこともあった。 		

【17】ブロック評価報告書

取組名	大山パークウェイを座標軸にした地域の魅力アッププロジェクト	対象地域	鳥取県、島根県、岡山県
派遣伝道師名	岩佐吉郎、小出宗昭	取組主体名	NPO法人 大山中海観光推進機構
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 取組主体は、この地域の観光振興に関連する様々な取組を実施してきた実績を有する団体である。本取組は、「地方の元気再生事業」に採択されたものであるが、大山周辺地域に分散する観光スポットやイベント等を大山パークウェイという視点で一体的に捉え、広域連携で地域の活性化につなげていくという試みであり、事業終了後の22年度以降、どのように展開していくかが問題。 ○ 今回の人材力事業では、22年度以降の展開も見据え、地域の観光資源を再確認し、どのように魅力を発信していくことが効果的なのかという点について、総合的な助言やアドバイスいただいた。 ○ 観光振興の専門家(岩佐伝道師)と、起業のスペシャリスト(小出伝道師)という組み合わせでの派遣実施であったが、岩佐伝道師からは、他の地域の観光振興の具体例を示しながら、「観光振興のあり方」や「どのような視点をもつべきか」といった、今後の取組にかかる総合的アドバイスから、(地域の出身でもあり、ある程度、地域の実情にも通じていることもあり、)地域の観光についての具体的かつ的確な助言をいただいた。また、小出伝道師からは、一貫して、マーケティングの重要性について、豊富な具体例に基づくアドバイスをいただき、結果として、観光振興のあり方と観光商品の組み立て方、商品の売り出し方という立体的な視点からアドバイスいただけたことは成功点。 ○ 両伝道師から指摘される問題点や今後の取組等は重なる部分が多く、問題点がクリアになった(関係者が共通認識できた)ことも成果である。本取組は、地域が広範囲(島根県東部～鳥取大山周辺～岡山蒜山地域)であり、関係者も、行政、NPO、事業者等と多岐に渡っている。本取組の実施にかける直接の関係者だけでなく、多くの関係者を集め意見交換ができたことは大きい(本事業の直接的な成果ではないが、事業実施を通して、今まで直接的な付き合いのなかった地元団体や関係者との交流ができたことは人材力の強化につながったといえる)。 		
奏功した点	<p>伝道師からの助言により、現状の問題点や今後の方向性についての整理ができたこと。</p> <p>(上記のとおり、本取組は、地域的に広範囲で、関係者・関係団体も多岐に渡っており、考える方向性といったものも多様である。地域では具体的な事業等に関しては、メール等により密な連絡をとっているが、「今後の方向性・あり方」といった、抽象的ではあるが、今後の展開を考える上で大事になるテーマで、関係者が直に顔を合わせてディスカッションできる機会は貴重であり、特に、伝道師という助言者・アドバイザーの存在が、結論の出にくい議題について、議論が堂々巡りに陥ることを防ぐ効果があったといえる。)</p>		
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 具体的な問題点や解決すべき具体的な事項があつての事業選定ではなく、「人材力強化」という目標の曖昧さから、当初は実施主体に戸惑いが見られた(伝道師にも、どこまで踏み込めばいいのかの戸惑いはあったのではないか)。 ○ 結果的には、実施主体や関係者各々が考えている今後の取組(地域の観光振興)の方向性など、地域全体のことにに関して発言する機会となり、これに伝道師が助言を行うことにより、自ら問題点に気づき、関係者の共通認識として今後につながる(人材力強化につながる)事業になったと思われるが、これは、実施主体の(伝道師の助言を咀嚼できるだけの)能力に負うところが大きいと思われる。具体的な問題は発生しなかったが、派遣事業を行うに当たって、事業の目標が漠然として不明確であったことは問題点である。 		
今後のフォローアップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本取組は、ある程度自立して事業を展開できており、現状では、国として特段のフォローアップは必要ないと判断。 ○ (伝道師にも指摘されたことであるが、)今後とも関係自治体(特に県)が積極的に関わることは必要であると思われることから、これら自治体との連携を促す支援ができればいい。 		

【18】実施報告書

取組名	「中海再生プロジェクト」	対象地域	鳥取県境港市
派遣 伝道師名	山本和子、木村俊昭	取組 主体名	NPO法人 未来守りネットワーク
目標・ 期待	<p>中海の海藻類を利用した、海藻堆肥・海藻飼料等を作ることで水質浄化に寄与し、漁業・農業・畜産・酪農業の再生を図り、この海藻堆肥を使用した農作物については、食の安全・安心を消費者へ提供しブランド化することにより、第一次産業の雇用の増大につながり、過疎化に苦しむ地域の「まちづくり」に寄与する。中海の海藻除去は、水質浄化に大いに寄与し、内水面漁業の再生、「山～川～海」へとつながる環境リサイクルと雇用を確保し、生物多様性の再生が可能になる。</p>		
伝道師の 活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ 的確な時期に伝道師から連絡があり、状況に応じた助言や対応策をいただき、大変助かった。4年前より一部の農家に依頼して海藻堆肥を利用して稲作の試験栽培を行っており、毎年品質の良い米ができていたが、山本伝道師から海藻堆肥の更なる普及については、米以外に使用できるためには、産・官・学の連携と有機栽培を中心に活動している農家や地元で農産物の差別化に興味のある有力な農家・青果市場への地道な普及活動・PRが必要とのアドバイスがあった。また、現在日本で有名ブランド商品として売り出されている農産物の堆肥として使用するような仕掛けを「未来守りネットワーク」を使うよう提言があり、徳島県の「鳴門金時」の土地改良剤として使用する可能性が出てきた。 ○ 海藻飼料を食べさせることによって、牛のゲップを抑えることができるため、CO2の削減や肉質の向上・免疫力の向上に役立つ可能性があり、関連大学との連携を図るよう各機関に働きかけてみてはとのアドバイスがあった。このように海藻利用は今後多くの可能性を持っているので、できるだけ早く産・官・学との連携を図り、実行するよう提言をいただいた。 		
効果・ 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 青果会社1社と有機栽培農家「ええもん畑」40農家と鳥取県日南町海藻米生産組合の20農家が各種野菜の試験栽培に着手し、続々と好結果が出ている。これも山本伝道師に2度の講演をいただき、各農家のやる気を引き出していただいた結果。販売も小売業3社が海藻栽培コーナーを設ける予定。 ○ 産・官・学の連携・・・鳥取県の西部県民局が中心となり、農林局・鳥取大学・鳥取県衛生研究所等が海藻リサイクル事業に本格的に参画することになった。また、山本伝道師が一番心配された、企業との連携も順調に進み、興味のある地元企業2社が参画する予定。 ○ H22年3月末より、徳島県の農林水産総合技術支援センター農業研究所・徳島大学と連携して、ブランド芋「鳴門金時の再生プロジェクト(連作障害防止)」の試験栽培を行うことになった。海藻堆肥に対しかかなりの期待を寄せている。また、岡山県倉敷市の「JAかさや」農協において海藻堆肥の講演依頼があり、3月17日に実施。海藻リサイクルは、少しずつ確実に広がっている。 ○ 畜産においても、鳥取県西部の酪農家が海藻を牛に飼料として採用したいとの要請があり、現在鳥取大学と協議しており、近日中に結論が出ることとなっている。 		
今後の 課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 海藻リサイクル事業は設備費がかかるので、NPO未来守りネットワークだけの資金では困難なため、どうしても企業の資金力や国・県の補助金が必要。 ○ ブランド化、販売・広報戦略についての検討 → ①堆肥を中心としながら、②飼料、③食用、乾物、新素材等への活用、④ブランド化に向けて分かりやすいネーミングを付けること。例えば、「ええもん畑」の海藻ミニトマトのネーミングは良い。できるだけ早く「海藻商品(農産物や飼料)のネーミング」を考える。 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ 海藻堆肥化のためのプラントへの初期投資は、約2,000万円と想定。(土地・保管は別途リースを検討)海藻を年間600t採取、乾燥後約200tの堆肥の製造可能。堆肥の単価を20Kg/4,000円で10,000袋製造し、この堆肥を完売した場合の総売上は4,000万円になる。しかし、米生産では実績(年間50t以上)はあるが、野菜・果樹等には実績がなく、今後の成果が重要になる。 ○ 海藻リサイクル事業は、「未来守りネットワーク」の方針では地域還元・地域活性化への貢献(水の環境循環・山～川～海)をつなぐ環境循環の再生・地域における雇用創出等があり、この再生事業が社会的に認められるか、この事業以外にも「環境教育・観光(藻刈りによるアサリの増加とその効果・還元)」等、幅広い活用方法を検討していきたい。 		

【18】ブロック評価報告書

取組名	「中海再生プロジェクト」	対象地域	鳥取県境港市
派遣 伝道師名	山本和子、木村俊昭	ブロック 名	中国圏ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中海の水質悪化の要因の一つとされる海藻を除去するとともに、それを堆肥化し、米をはじめとした農産物の栽培に活用、地域の特産品として地域活性化につながる資源化を目指した取組。中海の環境改善と地域活性化の両立を目指す取組の視点は高く評価できるものである。 ○ 概ね半年程度の短期間ではあるが、伝道師の指導・助言等を踏まえつつ、事業主体であるNPO法人「未来守り(さきもり)ネットワーク」が積極的に行動した結果、①事業の方向性を見極め、②海藻堆肥を使用した農産品の生産農家や販路の拡大等について、具体的な動きが見られるようになったことが大きな成果であると考えられる。 ○ 中海の環境改善、海藻を活用したビジネスモデルの構築、その効果による地域活性化など、元来事業が目指すテーマは非常に大きなものであることから、今後も実施主体による中長期的に持続的な取組が必要である。地域活性化に寄与していくためには、当該地域における自治体を含め、様々な主体との広範な連携が必要と考えられる。 		
奏 功 し た 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 成果として地域活性化伝道師からの助言・指導の下、以下の論点整理・具体的な提案等を行い、事業の進捗を支援することができたと考える。 ○ 事業における課題整理(事業の方向性等の出口戦略、事業性確立につながる入口戦略など)。 ○ 海藻の活用方法についての提案(堆肥以外に、飼料、食用等への展開の可能性)。 ○ ブランド化や広報戦略についての提案(ブランディングの考え方、ネーミング)。 ○ 地域農家等に対する普及啓発。 ○ 事業性確立に資する助成メニューについての提案。 ○ 中国圏地方連絡室における情報提供及び連絡調整。 		
反 省 点	<p>まずは足許の事業の方向性・実現性を固めていくことが重要であり、その点については上記のとおり、具体的成果を伴うものとなった。しかしながら、当該事業の理念には「地域への還元」、「地域活性化への貢献」といった要素(例えば、山～川～海をつなぐ環境循環の再生、事業の効果として地域における雇用創出など)が含まれており、そうした地域活性化に資する出口戦略について、短期間の検討であったことから、必ずしも十分に踏み込めていないことが反省点であり、今後の課題である。</p>		
今 後 の フ ォ ロ ー ア ッ プ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 同事業の持つ環境改善・地域活性化という視点を踏まえ、当該事業の効果が地域にどのように浸透、波及し、地域の活性化に資する取組として有効に機能していくのかという点について、今後の検討に期待したい。 ○ 地元自治体を含め、地域が自立的にこうした課題を解決していく上での取組が広範に進むことが地域にとって有効であると考えられる。 		

【19】実施報告書

取組名	防府市観光協会の社団法人化に伴う「地旅」の商品化及びPR	対象地域	山口県防府市
派遣 伝道師名	金井啓修、清水慎一	取組 主体名	観光資源活性化推進協議会
目 標	市内の観光資源の魅力を最大限に活用するため、体験メニューを含む着地型旅行商品の造成を促進させるため、地元発の観光コース企画を10本提案する。		
期 待	観光コース案を作り上げる過程において、旅行市場で注目を集める価値の高め方、数ある観光資源の中から価値の高い素材発掘のノウハウに関する指導・助言。		
伝道師の活動状況	<p>1. 金井伝道師(H21.8.26~27) → 観光資源視察・コース企画のためのノウハウ指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 市内の観光資源が社寺仏閣、文化財観賞を主としていることから、「風水」を切り口とした演出がよいとの助言。 ○ 安易に「正解」を伝道師に求めようとしている姿勢に対して、当事者意識の薄さを厳しく戒められた。これがきっかけとなり、主体的な活動が見られるようになり、自主的にコース素案を10件作り上げた。 <p>2. 清水伝道師(H21.9.17) → 観光コース企画素案に対する指導と助言</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 取組主体より企画された観光コース素案10件に対する評価と助言をいただく。 ○ 素案の各コースとも、実際にテストツアーを行って顧客の反応を示すよう指導を受ける。 ○ 地域振興として観光振興を進める上で、地域連携の重要性を強調、協議会の連携強化と、協議会が観光客の玄関口となって、地域の暮らしを観光客に触れさせるべきと指導。 <p>3. 自主会合(H21.10.28日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ テストツアーの実施を協議。販売チャネル(旅行会社との連携)に乏しいため、関係者によるテストツアーを行うこととした。 <ul style="list-style-type: none"> ① H21.11.25 テストツアー実施 ② H21.12.16 テストツアーの結果検証。販売チャネル確立の為、「旅行素材資料集」を作り営業強化を行うこととした。 ③ H22.2.17 「旅行素材資料集」の内容検討 ④ H22.3.16 清水伝道師を迎え、「旅行素材資料集」の評価とPR面での助言をいただく。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 市内の各観光施設では、これまでも独自に誘客活動に取り組んできたが、伝道師の指導のもと一同に会するようになり、地域の魅力について相互に議論をする場となり、相互連携の新たな取組が生まれるなど、期待以上の効果があった。 ○ 伝道師指導にあたり、伝道師に安易に「正解」を求めようとする姿勢を戒められた。この反省から協議会会員が自ら考え、行動する取組体制へと成長できたことも成果の一つであった。 		
今後の課題	伝道師からは、防府の取組は既に実証段階に入っており、実際に顧客と対することで成果が得られると指導を受けた。しかし、実証の場面では旅行商品を造成する実務が必要である。防府市観光協会は自らが旅行業登録を視野に入れているものの、登録は早急に行われるわけでないため、当面の間は既存の旅行会社とタイアップした取組が求められる。旅行会社には取組主体と対等な立場として、リスクも共有しつつ旅行商品の市場投入を働きかけることが今後の課題である。		
その他	○ 観光資源活性化推進協議会の行動指針となった伝道師の言葉 「すでに学ぶ段階は終了している。顧客と向き合い、地元が顧客にサービスを提供して、観光素材からお金を生み出す作業をしながら行動する段階に入っている。」「成功するには必ずリスクを負う。困っていることが成功への動機付けであり、困っていないなら行動する価値がない。」		

【19】ブロック評価報告書

取組名	防府市観光協会の社団法人化に伴う「地旅」の商品化及びPR	対象地域	山口県防府市
派遣伝道師名	金井啓修、清水慎一	ブロック名	中国圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平成21年8月27日(木)に金井伝道師、9月17日(木)に清水伝道師が防府市を訪問し、地域観光資源をいかした着地型の旅行商品をつくる初めての試みと、市の主要観光地の代表と観光施策に携わる関係者が一同に会する初めての会合へ助言と指導をいただくことになった。 ○ 今回、内閣官房の地域の人材力強化に向けた取組推進に採択されたことを受けて、防府市観光協会が中心となり、観光資源活性化推進協議会を立ち上げることになっていたが、二次産業に特化してまちづくりを進めてきた防府市にとっては、観光を大がかりに実施した経験がなく、どのような道行きで旅行商品を具現化するのか、主要な観光地の連携をどのように図っていくのか等の蓄積が全くない状態での船出であった。 ○ しかし、観光組織の立ち上げから、着地型旅行商品の創成に深い知識と経験を持つ地域活性化伝道師の参加により、観光資源活性化推進協議会の構成員一人ひとりのやる気が引き出され、何度もトライ&エラーを繰り返しながら、最終的には旅行会社への売り込みに使用する旅行商品素材集が完成することになった。やる気の具体的な発露としては、市内主要観光地の代表が観光地の案内を自ら買って出たことや、協議会の事務担当者が総合旅行業務取扱管理者試験を自発的に受験し合格したことなどが挙げられる。 ○ 人へのインスパイアという点で、この人材力事業は相当な効果を発揮したといえる。旅行素材集は、複数の旅行会社から、商品化したい旨のオファーを受けていることを申し添えたい。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域活性化伝道師の励ましを受けた観光資源活性化推進協議会の事務担当者のモチベーションが上がり、派遣を契機に総合旅行業務取扱管理者試験の学習を始め、結果合格し、旅行会社との素材の商品化交渉が円滑に進むようになった。 ○ 市内の主要観光地と商業者が初めて連携した。 ○ 各地の成功事例や成功体験の情報が入り易くなり、旅行商品素材集の作成のみならず、協議会参加者の観光に対する自発的な創意工夫が見られるようになった。 ○ 清水伝道師の影響で、防府市の旅行業者へのパイプが太くなり、観光に関する動向が把握しやすくなった。 		
反省点	<p>派遣の初期に、地域サイドが伝道師に観光に関する回答を求める場面に遭遇した。地域サイドに対し、伝道師は地域の自発的な活動に助言を与える人々であり、答えを与えてくれる救世主ではないことを徹底しておく必要を感じる。</p>		
今後のフォローアップ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体総括においても触れたとおり、具体的な商品化の話が出てきている。観光は着地型旅行商品が発現すれば終了という訳ではないため、東アジアを中心とした観光動向や流行りの観光施策等の情報提供を国として実施する必要がある。 <p>例) 中国の映画「非誠勿擾(狙った恋の落とし方。)」のように、中国国内でのヒット情報を国が事前に地方へ連絡し、中国人観光客の取り込みに成功した事例。</p>		

7. 四国圏ブロック

【20】～【23】

【20】実施報告書

取組名	次世代の湯治場 ～ Every バーデ メ タボクリニック in 室戸 ～	対象地域	高知県室戸市
派遣 伝道師名	刀根浩志、田渕正人	取組 主体名	次世代の湯治場検討協議会
目 標	次世代の湯治場検討協議会で取り組んでいる健康観光をはじめ、室戸市の観光振興において(社)室戸市観光協会を中心としたワンストップ窓口の整備構築を行うことにより、室戸市への来訪者等の満足度の充実を目標とする。		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 以下の内容に係る指導 ① 室戸市の地域資源をいかした体験メニューの磨き上げ、充実 ② 来訪者の満足度の向上を図るための取組と運営体制の構築 ③ (社)室戸市観光協会のワンストップ窓口の整備・構築 ④ 将来的に(社)室戸市観光協会の自立した運営が可能となる運営体制の構築 		
伝道師の活動状況	<p>1. 以下の内容について助言・指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 室戸市全体として活性化することを目的とした将来像(ビジョン)の策定が必要(前段として、地域の魅力の再確認が必要) ○ 将来像(ビジョン)の市役所、商工会、観光協会、その他地域の人々の共有とその実現に向けたムードの醸成及び体制の構築が必要 ○ これまでの取組の結果に対する徹底的な検証(旅行商品参加者が少ない原因等)とそのデータベース化(及び情報共有) ○ 情報発信の内容及び方法の再検討 ○ 人材育成に向けた外部専門家の活用の検討 <p>2. 具体的な提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 既にある水産会館で朝取れた魚を使った「室戸めし」を地域の人々が提供しおもてなしをすることで、新たな出費等がなくても地域の活性化が図られるのではないかと。 ○ 室戸の街が1つの病院というコンセプトで、都市生活に疲れた人の癒やしの場に、というような健康観光のあり方も考えられるのではないかと。 ○ 住民に対しては、この健康観光しか室戸にはない、ということを真に理解してもらい、協力を得られるよう説明・説得を行ってほしい。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 次世代の湯治場検討協議会の委員の目的意識・ビジョンの明確化が不十分であったように伺えられる指摘をいただき、協議会において再確認、検証等を行い、今後も継続して取り組んで健康観光の本格的展開を目指すこととなった。 ○ 営業展開、情報発信の手法等が不十分であり、今後はターゲットを絞り込んだより効果的な取組を検討し、実施することとなった。 ○ 伝道師に、客観的視点で事業への取組についてのアドバイスをいただき、協議会としての運営体制等、共通認識を持つことができた。 ○ 各課題についてこれまで取り組んできた対策が不十分であったことが認識できた。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ ビジョンの明確化を図ると同時に、課題や強みなど認識の共有が不可欠であり、室戸市全体を包括した推進体制の構築が重要 ○ 室戸市を売り出す施策は、人の魅力が大事である。 → 人材育成の必要性 ○ これまでの取組に対する検証が不十分 → 徹底的な検証とそのデータベース化 ○ 室戸という名前自体には知名度はあるので、その点も活用した地域ブランドの作り上げの実施 ○ 情報発信における認識不足 → 情報発信の方法等の再検討 ○ 上記を踏まえ、健康観光を掲げた旅行商品の開発と効果的な営業展開を図る 		
その他	今回の事業において検討された課題に対して、一挙に解決するのではなく、可能なことから優先順位を決めて課題を克服していくことにより、地域住民が満足いくような地域振興を目指す。		

【20】ブロック評価報告書

取組名	次世代の湯治場 ～ Every バーデメ タボクリニック in 室戸 ～	対象地域	高知県室戸市
派遣 伝道師名	刀根浩志、田渕正人	ブロック 名	次世代の湯治場検討協議会
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高知県室戸市においては、室戸岬近辺において採取される海洋深層水を活用し、滞在型の観光を振興することによって地域活性化を図ろうとしているところ。そのため、次世代の湯治場検討協議会で取り組んでいる健康観光について、コンテンツの磨き上げを行うとともに、室戸市の観光振興において、(社)室戸市観光協会を中心としたワンストップ窓口の整備構築を行うことにより、室戸市への来訪者等の満足度の充実を目標としていた。 ○ 海洋深層水、新鮮な魚介類、水産会館などの資源が存在するにも関わらず、観光客として入込みを期待するターゲットが明確でなく、室戸市、商工会、観光協会などの関係者の連携も不十分で室戸市の持つ観光の魅力が十分に発揮されていなかった。 ○ 地域活性化伝道師の指導により、市全体で目指すべきビジョンに基づいて戦略的に観光資源を売り出すことの必要性が市内の関係者に認識されるとともに、それらの関係者が連携して取り組んでいく環境が整った。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ その場その場の対応の中で、直面した課題に一つ一つ対応するスタンスでは物事が進捗しないこと、市全体が一丸となって目指すべき将来ビジョンのさらなる磨き上げと観光客のターゲットの絞り込みが必要であることが認識された。 ○ 室戸市、室戸市観光協会と次世代の湯治場検討協議会の事務局である室戸市商工会の連携が図られておらず、自律的に連携する契機すら存在しなかったものが、議論・検討のテーブルに着く体制が整った。 		
反省 点	<p>コンテンツの磨き上げやワンストップ窓口の設置という抽象的な取組内容だけが強調され、そもそもどのような観光客をターゲットにするのかといった消費者ニーズを踏まえた検討がなされておらず、その必要性を現場に理解していただくことに時間を要したため、取組の具体化まで至ることができなかった。</p>		
今後 のフ ォ ロ ー ア ッ プ	<p>地域の担い手等の要請に応えることに留まらず、当事務局から積極的に状況把握等のフォローアップを行い、現場の熟度に応じて地域活性化伝道師を派遣して伝道師の指導を仰ぐようにできるようにする必要がある。</p>		

【21】実施報告書

取組名	上勝発！里山の彩生 ～ 地域を育む土・水・森・風・人が彩る観光プロジェクト ～	対象地域	徳島県上勝町
派遣 伝道師名	清水慎一、高木義夫	取組 主体名	徳島県上勝町
目 標	平成19年度に生まれた「上勝アートル山の彩生」を継続発展させ、環境や地域資源の活用等を考慮した地域に根づく仕組みを構築し、地域住民の自発的な活動への関与により、「人・もの・情報」を活動で連携した、新たな町内観光としての受入態勢を整える。具体的目標として、①上勝アートル山の彩生ワークショップイベント実施及び新たな参加型作品づくり、②おらが案内人塾(案内ガイド登録者10名)、③農家民宿勉強会(農家民宿登録3軒)、④地域のお土産開発の実施(新しいお土産開発3個)等を通じ、観光入り込み客数増により、地域経済の向上を図る。		
期 待	「上勝アートル山の彩生」イベントを実施するが、観光商品化にするための観光業の知識を持った人材や地域資源を使って加工から商品として販売できる体制づくりについて指導する人材が町内では確保できないので、本年度に実施する「上勝アートル山の彩生」ワークショップイベントと併せての伝道師による実践指導により一歩でも前進できることを期待。		
伝 道 師 の 活 動 状 況	<p>1. 高木伝道師(H21.10.13)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 上勝アート「射手座造船所」、射手座造船所案内所及びたぬき会販売所、いっきゅう茶屋「ひだまり」及び日比ヶ谷ゴミステーション、上勝アート「もくもくもく」の現地で、取組内容を説明。 ○ 特産品開発の担い手となる上勝町商工会の特産品開発チーム等から取組について説明。伝道師より、商品デザイン、販路開拓、消費者ニーズの把握等の重要性について指導いただいた。 ○ 福原ふれあいセンターホールにおいて、「キレイのさと美郷」の特産品開発について講演会及び意見交換会を実施。 <p>2. 清水伝道師(H21.11.24)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 上勝アート「射手座造船所」、「もくもくもく」、射手座造船所案内所及びたぬき会販売所、「ひだまり」及び日比ヶ谷ゴミステーション、日本の棚田百選「檜原の棚田」、にほんの里百選「八重地」の現地で、取組内容を説明。 ○ 観光商品開発について講演会及び意見交換会を実施。本町を見て、歩いて楽しむことができ、ありのままのまちづくりと人の姿を提供できる1,000体験プログラムにより、子供、外国人が本町に訪れてもらえる体制づくりが観光振興になると指導を受ける。 <p>3. 高木伝道師(H22.3.19)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 前回の派遣の指導を踏まえ、コミュニティセンター(役場前)にて、上勝町商工会等が開発した地元資源を活用した特産品の試作品を紹介。6ヶ月後の短期間での特産品の試作品であったが、実際に試食し、地域資源を活用した加工品の味付け及びデザインの物語性について、まずまずの評価を得た。 ○ 販売する場合に高くなってもコスト計算をし、販売価格に転嫁して決定することなど、販売戦略等について指導を受けた。 		
効 果 ・ 成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新たな参加型作品づくり → 大北地区において土屋公雄氏とアート制作に向けた取組が開始 ○ おらが案内人塾(案内ガイド登録者10名) → 国内旅行業務取扱管理者の資格取得1名 ○ 農家民宿勉強会(農家民宿登録3軒) → 1軒開業(農家民宿「わかか」)及び1軒申請中 ○ 地域のお土産開発の実施(新しいお土産開発3個) → そばほわっとケーキ販売及び椎茸ふりかけほか2件の試し販売、上勝野菜の漬け物を販売、上勝しあわせアイス販売と新パッケージ化 ○ これらを通じ、観光入込客数増により、地域経済の向上を図る → いっきゅう茶屋の客数(H20:29,340人→H21:30,202人 4月～2月前年比2.9%増) 		
今 後 の 課 題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 特産品の開発において、販売する場合にあまり大きな施設でないが加工施設整備が必要。消費者ニーズにあった開発が必要であり、販売のマーケティング、試作開発時に助言ができる人材が不足。 ○ 農家民宿の件数増加を図るため、手続きを指導する体制づくりが必要。本年度から3年間、とくしま農林漁家民宿村モデル事業(県補助100万円)と連携しつつ開業を誘発することになった。 ○ アートイベントから商品化への試作販売が必要。国内旅行業務取扱管理者への支援と町内組織化。 ○ アート制作(土屋公雄氏)のための資金確保(平成21年度に活用した(財)地域社会振興財団等の財団資金の活用が可能かどうか)。 		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内旅行業務取扱管理者への助言を継続するとコメントが伝道師よりあり力強く感じている。 ○ 全国的な情報と卓越した技術能力での指導を現場で直接にいただき、一歩前進できた。今後も、最低3年間はともに実践活動に参画していただきたい。 ○ 特産品の試作品等が多くできたので、徳島市内の空き店舗などを利用し、かみかつ物産店を開設し、販売活動の展開を検討してはとのご指導があった。 		

【21】ブロック評価報告書

取組名	上勝発！里山の彩生 ～ 地域を育む土地・水・森・風・人が彩る観光プロジェクト ～	対象地域	徳島県上勝町
派遣伝道師名	清水慎一、高木義夫	ブロック名	四国圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 徳島県上勝町においては、平成19年度の国民文化祭をきっかけに実施された「上勝アート里山の彩生」を継続発展させることにより、町内観光の受入態勢を整えていくこととしている。そのため、上勝アート里山の彩生ワークショップイベントの実施、新たな地域住民参加型の作品づくり、案内ガイドを養成する「おらが案内人塾」の開催、農家民宿の勉強会及び地元の産品を活用したお土産開発の実施等を通じ、観光入込客数の増加を図ろうとしているところである。 ○ 地域活性化伝道師の指導により、土産品が開発された。また、町全体で戦略的に観光資源を売り出すことの必要性が町内の関係者に認識されるとともに、それらの関係者が連携して取り組んでいく環境が整った。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「まずは、楽しくみんなで意見を出し合い、特産品をつくってみるべき」という伝道師の指導の下、各団体ごとに数多くの試作品を作ることができた。また、同じ商品でも都会向けと地元販売向けに包装及び値段等の変化をつける等、ターゲットを明確に定める販売戦略が重要であるということが認識できた。 ○ 観光・交流分野について、上勝ツーリズム拡大連絡会議を組織化することでできたことにより、町内の行政を含めた各団体が連携をして取り組む体制が整った。 		
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高木伝道師は2回、清水伝道師は1回の派遣と、派遣回数が少なかったこと、派遣時期等の関係から相互の連携がうまく取れなかったことが挙げられる。 ○ 特産品については、数多くの試作品が作られたところであるが、農家民宿や案内人の観光分野については、伝道師が望むレベルまで、地元の熟度が達していないように思われる。 		
今後のフォローアップ	<p>今後とも、地域の実情を把握するとともに、現場の熟度に応じて地域活性化伝道師を派遣して伝道師の指導を仰ぐことができるようにする必要がある。</p>		

【22】実施報告書

取組名	小豆島 食で島おこし ～ 食と観光の融合 ～	対象地域	香川県 (土庄町、小豆島町)
派遣 伝道師名	木村俊昭、小出宗昭	取組 主体名	小豆地区商工会連絡協議会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域資源を活用した特産品やサービスの開発・販売・提供し、「小豆島食べ歩きマップ」の作成や地場産品と島内観光を組み合わせた観光商材の開発を目指す。 ・小豆島地域産品の売上高の増 H22年度 2,000万円 (H21年4～6月 180万円) ・観光入込客数の増 H20年度 108万人 → H21年度 113万人 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 木村伝道師：今後、小豆島が一丸となって様々な事業や依頼を受けられるようになるための組織体制について【全体構想】 ○ 小出伝道師：島愛麺(とうあいめん)や、ひしお井といった小豆島地域産品の販売戦略・広告戦略について【商品の販売戦略】 		
伝 道 師 の 活 動 状 況	<p>1. 木村伝道師 (H21. 10. 27～28)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域活性化は、部分的にやれば利益より害の方が多くなるおそれもあるので、全体とどう関連させていくのが重要との助言により、本委員会のメンバーで幅広い有識者の意見を聴ける組織体制と全体構想について再度検討を行った。次回の委員会から小豆島の地場産業の関係者や学校関係者など多くの方に参加いただき、当初の期待を大きく超える有識者の意見をいただくことができた。 <p>2. 小出伝道師 (H21. 11. 14～15)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域活性化は、島の皆で取り組み、(各々が)今できることから取り組むことが大事であると教えていただいた。まず、販売戦略の基本であるアンケート(顧客)調査を、11月21～23日の3連休で取ってはどうかと提案いただいたので、小豆島内の9か所(港、ホテル、観光名所等)で、3,000枚のアンケート調査を行った。この調査により、観光客の特性や要望が把握でき、今後の販売戦略を検討することができた。 <p>3. 木村伝道師・小出伝道師 (H22. 1. 30～31)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 優秀な人材を島外(県外)の優秀な大学に進学させることだけを目的とするのではなく、いかに優秀な人材が地元を好きになり、大学進学後も地元企業で働きたくなる仕組みを作ることが大事であるとのこと。そこで、両町商工会青年部の世代がコーディネートを行い、地元学生、親会商工会、行政を巻き込んで将来地元企業へ優秀な人材が残る仕組みづくりを企画していくことが決定。 ○ ブログを活用した販売戦略やマスメディアを活用したPR戦術を指導。そこで、小豆島1万人ブロガーを計画し、小豆島を全国に向けて発信していくことが決定した。現在、小豆島ブロガーの増強活動を行っている。また、当初の目標である「特産品の開発、マップ作成、観光商材の開発」に向けて、次年度以降に両町合同で行おうとの意見が関係者から出てきた。 		
効 果 ・ 成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでは、両町の地域性の違いのため、事業全体をコーディネートする人材がおらず、足並みをそろえた事業が難しかった。しかし、伝道師の派遣によって、両町商工会青年部の世代の協力体制が確立され、地元学生、親会商工会、行政を巻き込んだ小豆島が一丸となって様々な事業を受けられる組織体制が確立された。 ○ 次年度中小企業庁の支援メニューを活用して本取組を継続していく計画が関係者から出てきた。 ○ 今年度は「島愛麺とひしお井」といった一部の小豆島地域産品のみではあるが、当初の目標の「小豆島地域産品の売上高の増」については、H21年度は約1,000万円の売上増となった。今後は、本組織のネットワークを活用し、他の小豆島地域産品と組み合わせた販売戦略も行い、小豆島全体の売上増を目指していきたい。 		
今 後 の 課 題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 次年度以降も、両町商工会青年部の世代が本組織をコーディネートしていく中で、他団体から一目おかれるように両町の協力関係をより強化していくことが今後の課題。 ○ 本組織のネットワークをいかし、他の特産品と組み合わせた販売戦略を検討し、地場産品と島内観光を組み合わせた観光商材の開発を具現化させていくのが今後の課題。 		
そ の 他	特記事項なし		

【22】ブロック評価報告書

取組名	小豆島 食で島おこし ～ 食と観光の融合 ～	対象地域	香川県 (土庄町、小豆島町)
派遣伝道師名	木村俊昭、小出宗昭	ブロック名	四国圏ブロック
全体総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小豆島は、「二十四の瞳」の舞台やオリーブ園など、観光地として全国的な知名度を有しているが、中長期的には、人口や観光入客数の減少などにより産業が衰退傾向にあり、商工会青年層等が島の現状に強い危機感を有している。 ○ このような中、本取組は、島内の主要な関係団体(行政、商工会、観光協会、業界団体等)が、地域性(町民性や商いのスタイル等)の違いにより、縦割の状態になりがちだったため、オリーブ以外にも少なからず存する島の有力な地場産品(素麺、醤油、佃煮等)全体を、観光等他分野と連携させることを含め、島の活性化に十分いかしきれていなかったのではないかとの問題意識に立ち、島の外部から見た客観的・相対的視点というものを関係者が真摯に受け止める機会をもつことを通じて、現状打開の契機となることを目指すものである。 ○ 幅広い関係者が一堂に会し、島の活性化に向けて意見交換することができたことをはじめ、つながりができたことがまず大きな成果であり、アンケート調査など一定の実践や、今後の販売PR戦術の方向性の決定(ブログの活用等)など、島全体を活性化していくための連携・役割分担の在り方や具体的方策を模索していくための有益な機会となった。 ○ 今後、発想の転換に基づく関係者間の連携・役割分担の強化を進めていきつつ、新たな商品開発も具現化していくことを期待したい。 		
奏功した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 目先の部分的な最適化だけに目を奪われず、将来島全体が生計を立てていけるか、島全体に広く所得増をもたらすことになるかという「地域経営」「全体最適」の考え方を念頭に置きながら、まずは小さなこと、できることから実践していくことが大事であることが、関係者間で強く認識され、両伝道師から、日本全国で自ら携わった具体的な実践事例を豊富に紹介いただいたことにより、視野が広がり、まずは自分たちでできることから、最終的には島全体で取り組んでいくことに対する意欲が高まった。 ○ 将来の担い手育成のためには、島外に出た若者などが島に移住してきて働ける場と所得の創出が必要であることや、地元へ愛着を持たせる機会づくりといった長い目を見た仕掛けづくりが大切であることについても、意識が醸成された。 		
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本来分析の前提となる島全体の地域資源(飲食等可能な場所を含む)の一元的把握・情報共有が、なお十分になされていない。 ○ 商工会青年層等の熱意を十分にかし、関係団体を(今後、できれば農協、教育委員会、交通アクセス関係団体、団体非加盟の有力事業者等をも)適切に橋渡しし、実効的な連携を深めていくためには、地元行政が協力関係を一層強化し、仲介・情報提供機能を高めていくことが望まれる。 ○ 両伝道師から、旅費支給の制約について、改善要望をいただいた。 		
今後のフォローアップ	<p>今後とも、地域の実情を把握するとともに、現場の熟度に応じて地域活性化伝道師を派遣して伝道師の指導を仰ぐことができるようにする必要がある。</p>		

【23】実施報告書

取組名	雲の上のまち・ゆすはら 元気向上プロジェクト	対象地域	高知県梶原町
派遣 伝道師名	坂本世津夫、斉藤俊幸	取組 主体名	高知県梶原町
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域全体を総合的にマネジメントできる次世代のリーダー育成 ○ 次世代のリーダーが連携して地域活性化を推進する仕組みづくり (町内観光客入込客数増加(2,000人)、地域のリーダー的な人材の育成(10人)) 		
期 待	梶原町内の豊富な地域資源をもとに地域を活性化させていくに当たり、町内の様々な事業者をはじめ、産学官の関係者が効果的に連携し、個々の施策が一体的かつ総合的に推進されることにより、全体としての効果がより一層発揮され、併せて担い手の人材育成が持続的に図られるよう、総合的な経営マネジメント等の支援。		
伝道師の 活動状況	<p>1. 第1回(H21.9.1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 住民を代表して、建設業の傍らゆすはら社中(龍馬博サテライト会場運営)や梶原龍馬会の活動を意欲的に行っている川上豊昭氏を招き、現在の梶原町の状況を把握いただいた。 <p>2. 第2回(H22.3.31)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師の方々から、もはや内部で処理できる量を超えており、更なる変革や地域の向上を目指していくには、外部の支援を今後考えていくべきとの具体的な事業の提案もいただいた。 <p>3. このほか、11月10日、事務局において、再度町内の次世代リーダーの候補者等を招集し、現在の自分達の活動の説明や、活動を推進していく上での悩みを聞き取りした。その結果、個々の次世代リーダーは意欲的に活動を行っており、今後も経験を通じて成長していけると期待できた。時期をみながら人材育成を図っていくことが可能であると考えられる。しかし、これら活動を推進していくためには新しい組織を編成するだけでなく、核となる総合コーディネーターが必要であるということが出された意見から判明した。さらに、今は個々の活動が忙しく、仕組みや組織づくりを行おうとしても、コーディネーター役を引き受けることのできる人材(キーパーソン)が欠如している実情が浮き彫りとなった。</p>		
効果・ 成果	伝道師を招いて次世代リーダー候補者の意見を収集する中で、今後さらに地域活性化を推進していく上で不可欠なコーディネーターが不在であるのが現実であるものの、コーディネーターの存在は今後の地域を活性化させていくためには不可欠なものであり、そのための手法として外部からの意欲的な人材を呼び込んでいくことが必要であると考えられるようになった。		
今後の 課題	コーディネーターになり得る人材の確保。現状を打破していくためには、外部からの受け入れも検討しなければならない。誰が、いつ、どのような方法で今後行っていくのか。		
その他	次世代リーダー候補者から意見を収集し、要望があれば、伝道師から提案された外部からの人材の受け入れも検討していきたい。		

【23】ブロック評価報告書

取組名	雲の上のまち・ゆすはら 元気向上プロジェクト	対象地域	高知県梶原町
派遣 伝道師名	坂本世津夫、斉藤俊幸	取組 主体名	高知県梶原町
全体 総括	<p>○ 梶原町内の豊富な地域資源をもとに地域を活性化させていくに当たり、町内の様々な事業者をはじめ、産学官の関係者が効果的に連携し、個々の施策が一体的かつ総合的に推進されることにより、全体としての効果がより一層発揮されること、併せて担い手の人材育成が持続的に図られるよう、総合的な経営マネジメント等の支援することを目的に、地域活性化伝道師を派遣した。</p> <p>○ 関係者の連携を促進することと人材育成が両立するためには、地域活性化を推進していく上で不可欠なコーディネーターが必要であるが、現在の梶原町内には存在しないのが現実であった。地域活性化伝道師の指導により、梶原町において、解決のために有効と考えられる手法として、外部からの意欲的な人材を呼び込んでいくことが必要であると考えられるようになった。</p>		
奏功 した点	<p>町内の様々な事業者をはじめ、産学官の関係者が効果的に連携し、個々の施策が一体的かつ総合的に推進されるために、まずは町内において、構築すべき体制と必要な人材育成・人材招聘の方策について検討する必要があることが明らかとなった。</p>		
反省 点	<p>町内の関係者が多岐にわたり、関係者それぞれが行っている取組や抱えている悩みについて把握することから始める必要があるが、伝道師派遣の前に事務局職員が現場入りし、論点を整理する必要があることが明らかとなった。</p>		
今後の フォロー アップ	<p>今後、梶原町において、外部より人材を受け入れることなど総合的な取組の推進体制を構築する方策を検討することとしており、当該検討状況のフォローアップと適切な支援を行う必要がある。</p>		

8. 九州圏・沖縄県ブロック

【24】～【27】

【24】実施報告書

取組名	「食」と「器」の地域づくり	対象地域	佐賀県有田町
派遣 伝道師名	加藤文男、玉沖仁美、中澤さかな	取組 主体名	有田町地域活性化協議会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国見有料道路跡地での、農産物直売所を中心とした取組、組織化 ○ 内山地区が観光地として果たす役割(食事処、立ち寄り拠点、ルートマップ) 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 加藤伝道師： 成功に導かれた道の駅「枇杷倶楽部」の企画、運営、管理、地域との関わりをもとに、当町と類似点である、当初の企画立案についての助言 ○ 玉沖伝道師： レストランを開店するに当たり、認知してもらうためにどんな仕掛けをしたらよいのかという点の助言 ○ 中澤伝道師： 有田と同じように「萩焼き」に「食」をプラスした取組を展開されており、伝道師からみた有田の取組についての助言 		
伝道師の活動状況	<p>1. 加藤伝道師・玉沖伝道師(H21.10.1~2) → 地元協議会との意見交換、現地視察</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 加藤伝道師より、道の駅「枇杷倶楽部」の設立、運営方法、地域との関わりについて説明。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有田町は道の駅を作ることまでは考えていないが、道の駅を作る、作らないに限らず、ハードが問題ではなく、どんな機能を入れ込むかを重視すべき。 ・ 観光で客を呼び込むためには、人間は五感を刺激すればよい。一括受発注システムを構築し、タッグを組んでサービスや値段を全部一緒に道の駅がまとめて売ると、エージェントが動く、この仕組みが有効に働く。 ○ 玉沖伝道師からは、以下の助言をいただいた。 <ul style="list-style-type: none"> ・ リクルートのじゃらん観光ルート事業のデータでは、実は観光客は温泉、食べ物、名所・旧跡、宿の4つに興味がある。 ・ その土地に行ったら、その土地でとれる食材を用いた、そこでしか食べられないものを提供することで、観光客を誘致できる。 ・ 有田は、今手掛けている「小路庵」での料理と器をうまく組み合わせて、焼き物の情報も発信するとよい。色んな良いものが揃っているの、うまくコーディネートすればよい。 <p>2. 中澤伝道師(H21.12.16~17) → 地元協議会との意見交換、現地視察</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 中澤伝道師からは、以下の助言をいただいた。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有田焼は世界的に有名。もっと食を主体に味を添えるのが有田焼であり、食と器を融合すべき。佐賀県より有田の方が認知度が高いので、佐賀県内の有名な生産物を使うとよい。 ・ 食べるときは舌で味わって、器を見ながら目で味わって、耳からそれをつくったことを聞いて楽しむのが料理だと思っている。例えば、マイセンと姉妹都市なら、マイセンの料理、ソーセージとかベーコンの製法とかを学んで忠実につくるなどを模索すべき。 <p>3. 中澤伝道師(H22.3.26~27) → これまでの総括と今後の進め方についての意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 中澤伝道師より、有田町内の取組を聞かせてもらったので、自分なりにまとめてアドバイスをしたいとの話があり、3月実施を予定。 		
効果・成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ それぞれの活動を見直し、誰が何をやるのかが問題であることを再度考える機会となった。 ○ 小路庵で料理を提供する際、そこで使う器を各窯元に提供してもらい、料理と一緒に器や窯元まで紹介できるような仕組みをつくるきっかけとなった。 ○ 設立した観光情報センターを核に、官民が一体となる体制づくりが芽生えてきた。 		
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「食」と「器」を融合したまちづくりを考える中で、それぞれの活動を継続していくことが大切だが、その個々を誰が、どこで取りまとめていくのかが大きな鍵。 ○ 同じ料理でも、見せ方によっては美味しく上等に見えるため、その研究が必要。 ○ 飲食店を巻き込み、有田焼にこだわった店づくりをする、飲食店で使う器のスポンサーになってもらえる窯元を募る、滞在時間が長くなるような工夫をする。 		
その他	<p>加藤伝道師のまちづくり手段の話の中で、「誰がやるんですか」という言葉が、胸にズシンときた。</p>		

【24】ブロック評価報告書

取組名	「食」と「器」の地域づくり	対象地域	佐賀県有田町
派遣 伝道師名	加藤文男、玉沖仁美、中澤さかな	ブロック 名	九州圏・沖縄県ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有田町活性化協議会としては、人材力の取組強化として、具体的な事業の内容に踏み込んでの知見を得たいという希望だった。その意味では、食をテーマとした取組において、人を呼び込むために追求すべき点等、それぞれの伝道師の経験を踏まえた助言があり、そうした知見が取組メンバーの知識として共有された点は、人材力の強化として一定の成果があった。また、伝道師の助言を契機に、取組主体が明瞭になってきたことから、意識の醸成という面でも貢献できた。 ○ ただし、今後の具体的展開や個別の取組の主体が、あまり明瞭でない中で議論が進んでいたことから、今一步具体的ノウハウの伝授に踏み込めなかった面がある。 ○ 今後は、取組の核となる者を中心に具体的事業化に向けて検討するにあたり、多くの取組の中から重点的に取り組むものを選定し、まずは確実な成功例をつくりあげること、事業全体の推進力を高めていくことが望まれる。また、今年度設立された観光情報センターの組織基盤を確立・強化し、通年観光などの自立的な取組として継続的に発展していくことを期待する。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 食をテーマとした取組について、人を呼び込むために追求すべき点等、それぞれの伝道師の経験を踏まえた助言があり、メンバーの知識として共有された点は、今後につながるものと思われる。 ○ 個別の取組について検討がなされていたが、取組主体があまり明瞭でない中で議論が進んでいた。伝道師から取組の中心は誰が行うのか、それをきちんとすべきという助言があり、これを契機に観光情報センター等、各取組の中心となる主体が明瞭になってきたという効果が見られている。主体的に関わる意識の醸成といった点で、今後の取組を推進する人材の強化に貢献したと考える。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事業化など、今後の具体的展開や個別の取組の実施主体があまり明瞭でない状況下で、個別の取組の検討が進められていた。そのため、当初においては、具体的な事例に即した質疑等につながらなかったこともあり、いかに持続的に取り組むかというノウハウの伝授や詳細な助言に大きく踏み込めなかった面がある。 ○ 多様な意見の吸収は図られたものの、一貫して特定の伝道師から取組についての助言を受けるという形にできなかった点が惜まれる。 		
今後 のフ ォロ ー ア ッ プ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有田町には、宿泊施設が少ない(民宿)という点もあり、空き家を活用した宿泊等の検討等が進められている。人材力強化という観点では、同様の活動における成功者から助言を受ける機会を提供すること、また、そうした成功例を提供するという形での支援等。 ○ 地元農産物の販売についての商品開発、作製した有田焼のPR、販売促進といった面での支援。 		

【25】実施報告書

取組名	ひた・場所デザイン大学	対象地域	大分県日田市
派遣 伝道師名	後藤健市、松村拓也、吉田敦也	取組 主体名	日田市元気再生協議会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 歴史文化と豊かな自然環境という地域資源をいかし、自分の住む地域に希望と尊厳を持てるよう、積極的に課題解決に取り組む人材の育成を図るため、学びと実践を兼ね備えた市民大学(場所デザイン大学)を開講することにより、協議会として、本格的事業展開に向けた学習を開始。 ○ まちづくり会社設立に向けた、明確な目標設定・計画の立案策定 		
期 待	<p>まちづくりは「ひとづくり」からとの観点から、新たな組織づくりを推し進めるための助言・指導。派遣される地域活性化伝道師の方々は、いずれも現場を抱え、色々な取組に携わっている方々であることから、具体的な事例による話が聞けるものだと考え、具体的な課題を抱える私たちにとって、課題解決の方法・目標を学ぶことができると考える。</p>		
伝 道 師 の 活 動 状 況	<p>1. 後藤伝道師(H21.10.26、H21.11.18、H22.2.4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域に色々なビジョンを興していくことが大事。CB(コミュニティビジネス)やSB(ソーシャルビジネス)の創出、社会的に関わっていく事業体をおこしていくことが必要ではないか。 ○ 「中間支援組織」とは、行政と地域の間になんか様々活動を支援する組織であり、今後はこうした組織が必要になってくる。失敗を恐れず、まず踏み出す勇気をもつことが大事。 <p>2. 松村伝道師(H21.11.30、H21.12.14、H22.2.15)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「人々が地域自慢をし、他のエリアから人を招くこと」が大事。やりたい人がやればよく、そういう組織をつくる必要がある。地域の中で足並みをそろえることは難しいので、主体的に事業を担うことのできない事業者や団体をいつまでもあてにしてはいけない。やりたい人が独立して頑張ると地域は面白くなる。 ○ 「地域起業」とは、「どこか」にあるものではなく、「ここ」で起業することです。起業は何度失敗しても、誰でもできるチャレンジなので、とにかくやってみることが大事。 <p>3. 吉田敦也(H22.1.18、H22.2.8、H22.2.21)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 人と人をつなぐインターネットという1つのツールを、まちづくりや地域活性化のために活用していくことが大切であり、そのためには、ICTを活用した地域リーダーの育成、それを支援する地域のネットワークを形成していくことが、ICTを利用する本来の目的ではないか。 ○ 洞察力、観察力を養い、目で見て瞬間的に論理を組み立てて、頭の中でイメージしたものをビジネスの創出に利用することが大切。日頃、何でもない瞬間にチャンスが数多くあるので、その事に気づくことで新たなビジネスにつながる。 		
効 果 ・ 成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今回の講座を開講する以前は、課題意識はあったものの、詳細にわたる留意点等が明確になり、より具体的な課題と「価値ある目標」を確認することができた。 ○ 参加者にも、それぞれの活動指針や社会参加への意欲が芽生え、大いに期待通りだった。 ○ 22年度には、新たな公共・地域支援を目標とした、まちづくり組織の立ち上げを行う予定。 		
今 後 の 課 題	<p>まちづくり会社・SB等の創業において、地域における「連携」、「個の尊厳」、「冷静なシステムづくり」等、多くの事柄に配慮することが必要であり、具体的な活動を進めるときには、一定期間の連続した指導を仰ぐことが必要かと感じる。</p>		
そ の 他	<p>特に運営上の問題や不便さは感じなかった。改めて、伝道師派遣事業は、地方における人材不足を補う上で、効果のある事業だと感じた。</p>		

【25】ブロック評価報告書

取組名	ひた・場所デザイン大学	対象地域	大分県日田市
派遣 伝道師名	後藤健市、松村拓也、吉田敦也	ブロック 名	九州圏・沖縄県ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日田市元気再生協議会としては、豊かな地域資源をいかし、まちづくり会社を設立するため、その目標や計画の策定を行うに当たり、地域の担い手たちの認識を共有させておきたいとの思いで伝道師派遣を希望していた。 ○ 今回、「場所文化論」「地域起業」「地域ICT利活用」という観点から、その道の専門家である伝道師3名に講演・助言をいただくことができ、当初の目的であった「課題の明確化」が行われたため、担い手の士気向上に資するとともに、22年度には実際にまちづくり会社を立ち上げる予定であるため、本取組の将来性に期待ができる(商工会議所を中心に、地域内のネットワークが強いのも長所の一つ)。 ○ 今後は、(会社の立ち上げ自体が自己目的化するのではなく)伝道師のアドバイスをいかして、実際に魅力あるまちづくり会社を立ち上げることができるか、これまでのような「勉強」のステージから脱皮して地域の中で独り立ちできるようになるか、注視していく必要がある。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師、地域サイドともに熱意が感じられたため、相互の理解が深まったように思われる。特に後藤伝道師からは、「日田には資源(宝)も人もやる気もある。本当に頼もしい」との感想をいただいた(講演会形式として、伝道師と地域とのマッチングが成功した例といえる)。 ○ 吉田伝道師からは、佐藤日田市長との挨拶の場でも、「梅酒をはじめ、日田は良い素材を多く持っている」、「こうした取組などからも前向きな積極性もある」とのことから、「こうした取組に今後とも強く取組まれたらいいと思う」とのコメントを頂いている。 その上で講義の場では、ICTの持つツールの可能性につきさまざまに触れながら、それら幅広いツールとしての活用を日田としても積極的に取り入れたらどうかとのアドバイスをしていただいた。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域が、地域活性化のための目標・方向性を明確にしておく、地域活性化伝道師の講演・助言をより効果的に反映できる。 		
今後の フォロー アップ	特記事項なし		

【26】実施報告書

取組名	「着地型観光商品の販売・受け入れシステム」の構築	対象地域	宮崎県 (日南市、串間市)
派遣 伝道師名	石田東生、臼井純子、原文宏	取組 主体名	R448を語ろう会
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 交通手段が限られる地方における着地型観光の移動方法の検討・設定 ○ 観光者心理をも考慮した観光ルート・手段の設定 ○ 継続展開を見据えたビジネスモデルの構築・戦略立案 <p>により、具体的販売商品としての確実性・継続性を確立</p>		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 石田伝道師：日南海岸国定公園地域において、旅行者が選択しうる多様な交通手段及び今後の課題へのアドバイス ○ 臼井伝道師：マーケティング手法、商品価値の高め方、販売ルートの設定等、着地型旅行商品のビジネスモデル構築へのアドバイス ○ 原 伝道師：多様な地域から宮崎を訪れる旅行者が感動する風景を有する行程(ルート)の選定へのアドバイス 		
伝 道 師 の 活 動 状 況	<p>1. 石田伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 宮崎市内から対象エリアまでの複数ルート及びエリア内の交通状況を調査いただき、道路が持つ魅力と課題についてアドバイスいただいた。 ○ 全国の多様な地域から宮崎への交通の現状と課題について調査いただき、活用方法についてアドバイスいただいた。 <p>2. 臼井伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ マーケティングに必要なアンケートの取り方、解析の方法を具体的に指導していただいた。 ○ 行程上の様々な施設やエリアについて、旅行者での視点で魅力を発見し、さらに磨く方策へのアドバイスをいただいた。 ○ 同じく旅行者の視点で、課題・問題の指摘をいただき、改善へのアドバイスをいただいた。 ○ 地域の魅力をいかした旅のテーマ設定へのアドバイスをいただいた。 <p>3. 原伝道師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 宮崎空港及び鹿児島空港を起点に、対象地域までの複数行程を調査・評価いただいた。 ○ ターゲットの対象とできていなかった北海道発の宮崎行き旅行商品を調査していただき、北海道をターゲットにするためのモニターツアー企画へのアドバイスをいただくとともに、モニター募集を担っていただいた。 ○ 地域の魅力をいかした旅のテーマ設定へのアドバイスをいただいた。 		
効 果 ・ 成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の魅力への客観的評価によって、地域の人たちにも自信と希望を持つことができた。 ○ 問題・課題の整理とその実現可能な解決策へのアドバイスは、今まで、しょうがないとあきらめていた地域の人たちを、頑張ってみようという気持ちさせた。それは、伝道師の方々の親身さが地域の人たちに伝わったからだと理解している。 ○ 3名の伝道師の方々がそれぞれの専門性をいかし、複合的にアドバイスくださったことは、地域が抱える課題を包括的に整理し、課題解決への方策を見出すことに大変役立った。 ○ 北海道をターゲットにした2泊3日のモニターツアーを企画し、3月26～28日に実施できた。 		
今 後 の 課 題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 経済状態・経営状態があまり芳しくない地域における、来訪者満足度の確保 ○ 大手の旅行業者に頼らないで着地型旅行商品を販売するための全国ネットワークづくり ○ 旅行者の多様な興味を捉えた、多様なテーマ別旅行商品の開発 ○ 公共交通が発達していない地域での、貸し切り鉄道・バスやレンタカー会社との連携 ○ 地場の旅行会社との連携拡大と強化 ○ 県及び宮崎市・日南市・串間市の観光施策との連携・協働の実現 		
そ の 他	<p>実施主体である「R448を語ろう会」を中心とした取組であったため、観光メニューが限定された旅行商品の開発にとどまった。今後は、観光行政に参画していただき、観光施策の一貫した取組として、旅行者に満足してもらえる多様な観光メニューを盛り込んだ旅行商品を開発・販売していきたい。</p>		

【26】ブロック評価報告書

取組名	「着地型観光商品の販売・受け入れシステム」の構築	対象地域	宮崎県 (日南市、串間市)
派遣 伝道師名	石田東生、臼井純子、原文宏	ブロック 名	九州圏・沖縄県ブロック
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ かつて日南市～串間市の地域では、新婚旅行のメッカとして、多くの観光客が訪れ、観光産業が栄えていたが、旅行ニーズの多様化やグローバル化により、近年では観光客が激減しており、旅館・ホテルや土産店などが存続の危機に瀕している。 ○ 本取組は、宮崎県日南市～串間市の地域において、地域のもてなしを着地型観光商品として販売し、受け入れるためのシステム構築を行うものであり、地域の主要産業である観光産業の存続を目指すものである。 ○ 地域には、疲弊する観光産業に問題意識を持つ人達が存在し、対応する地道な取組が行われていたという素地はあるものの、外部ニーズや地域資源の価値など客観性を欠いた取組であったため、継続性に乏しく、単発的な取組にとどまっていた。 ○ 今回、地域活性化伝道師を派遣し、外部ニーズの調査手法やマーケティング・地域資源の活用方法など客観的かつ具体的なアドバイスを示すことによって、今まで行われてきた取組を継続可能な取組へと変容させ、結果として、3月26～28日(2泊3日)のモデルツアーの実現へ導いたことは評価に値するものである。 ○ 今後は、多様なニーズへの対応や取組効果の波及拡大のため、取組の対象範囲を広げ、地域行政と一体となった取組とし、さらなる展開を期待する。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域活性化伝道師から、それぞれの専門分野について、具体的・効果的なアドバイスが行われ、そのアドバイスがモデルツアーという一つの商品に結び付く結果となった。 ① 石田伝道師は、地域交通・情報通信・観光・交流に関する専門家であり、地域における主たる観光交通手段の検討やルート設定などについてアドバイスが行われた。 ② 臼井伝道師は、観光・交流、まちづくりに関する専門家であり、ニーズに対応した商品開発、マーケティング、商品活用の方法についてアドバイスが行われた。 ③ 原伝道師は、観光・交流、地域交通・情報通信に関する専門家であり、北海道における自身の体験を踏まえ、商品価値のある魅力的な風景や「もてなし」についてアドバイスが行われた。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域活性化伝道師の派遣回数や期間が限られたものであったため、モデルツアーの実現には至ったものの、さらなる展開については引き続き課題となっている。 ○ 完全に自立し、継続可能な取組とすべく、今後、モデルツアーの実施結果の分析や見直し、マーケティング方法や商品の多様化などノウハウを蓄積するシステムの構築が必要である。 		
今後 のフ ォ ロ ー ア ッ プ	<p>今回は、3名の地域活性化伝道師の派遣により、一つのモデルツアーを実現したが、より多様なニーズに対応する商品開発のため、農業体験や自然体験等を専門とする地域活性化伝道師の派遣、地域全体の取組とするため地域行政や商工会議所等他団体との連携、後継者育成体制の構築など、今後も可能な限りの支援を行い、地域の自立した取組としてより確実性を増す必要がある。</p>		

【27】実施報告書

取組名	「ローカル線(肥薩線)の「駅」を拠点とした観光(ツーリズム)事業創出プロジェクト」	対象地域	鹿児島県霧島市
派遣 伝道師名	岩佐吉郎、篠原靖、曾根原久司	取組 主体名	鹿児島県霧島市
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3万円プロジェクト：地域の人々が無理のない範囲で参画し、月3万円程度の副収入を得られるような手仕事づくりを考案し、地域の経済循環を図る。 ○ 700万人温泉入湯作戦：観光客の滞在時間を延長し、訪れる人すべてが温泉に入湯することを目標として掲げた。 		
期 待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 霧島市の魅力の発見・再認識とそのいかし方 ○ 観光地としての改善しなければならない具体的課題 ○ 地域活性化のための人づくりの手法 ○ ボランティアでは本来の活性化は見込めないので、その指導 		
伝道師の 活動状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 市の現状報告と現地調査 <ul style="list-style-type: none"> ○ 市観光課職員との意見交換、霧島市観光施策の説明 ○ 肥薩線にある築105年の木造駅舎(観光スポットとして人気のある駅舎)や沿線にある観光地・施設の調査 2. 観光地としての問題点の洗い出しと目標設定(案)検討 <ul style="list-style-type: none"> ○ 肥薩線沿線に照明を当て、この沿線地域が、これからの霧島地域の新たな魅力づくりに大きくつながることを提唱。例えば、「ふるきよき地方ライフの体験」など、霧島地域の他地区にはない魅力をより鮮明に打ち出すことなど。その上で、「霧島地域全域の魅力を高めるための、新しい観光ゾーン(地区)の形成」の必要性を提案。 ○ 加えて、この地域の観光ゾーン形成に向けた取組の方向性について指摘。主題は地域協働か。導入可能な国の支援措置についても言及。 ○ 肥薩線沿線地域の活性化を、霧島地域全域の観光の魅力アップにつなげるための具体策に言及。例えば、肥薩沿線地域に來られた観光客を、霧島地域全域に誘い込むための具体策について。 ○ 今後を見据えた霧島地域全域の観光の魅力アップのための幅広い提案。 例：「観光客すべてを温泉に入れる」ための提案 700万人温泉入湯作戦 ～滞在時間の延長～ (例)4時間→8時間 3. まとめ <ul style="list-style-type: none"> ○ コンセプトを持ち、具体的目標を定めることが今後の活性化につながる。 ○ 3人の伝道師は、多忙の中、3回にわたり協議を実施することができた。 		
効果・ 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 以下の点について認識し、関係者の意識を共有することができた。 <ol style="list-style-type: none"> ① 行政主体ではなく、地域主体としていくことが有効である。 ② ボランティアのみに頼るのでは、人を活用した地域の発展につながらない。利益を生み出すことが発展につながる。 ③ 現状では、明確なコンセプトや目標がない。方向性を明らかにし、地域が主体となる具体策を練ることが必要。 ○ コンセプトの提案や人づくりの必要性が明確になった。 ○ 官と民の連携や民同士の連携していくことも理解できた。 		
今後の 課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ コンセプトを持ち、目標を定める。 ○ ボランティア活動に終始しては、地域活性化は発展しない。人材育成の推進が必要。 ○ 地域活性化団体の活動状況の掌握や連携が図られる体制づくりが必要。 		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝道師と地域活動団体との協議の時間をもちたかったが、日程調整が困難であった。 ○ 伝道師からは、本地域については、指導助言された事項を具体的に進めることができれば、地域資源をいかした観光事業の発展につながるということが可能であり、魅力ある地域であるとのことであった。 		

【27】ブロック評価報告書

取組名	「ローカル線(肥薩線)の「駅」を拠点とした観光(ツーリズム)事業創出プロジェクト」	対象地域	鹿児島県霧島市
派遣 伝道師名	岩佐吉郎、篠原靖、曾根原久司	取組 主体名	鹿児島県霧島市
全体 総括	<ul style="list-style-type: none"> ○ 霧島市としては、人材力強化の取組として、市の魅力の発見・再認識といかし方、観光地としての改善しなければならない具体的課題、地域活性化のための人づくりの手法及び指導等について伝道師の知見を得たいという希望であった。 ○ 霧島温泉郷など、従来からの著名な観光地を抱える当市であるが、近年は「篤姫」効果など一時的な観光客増はあったものの、全般的に伸び悩んでいる状況。そうした中、肥薩線全線開通100周年記念イベントを契機として、沿線地域を霧島市の新たな観光資源としてスポットライトを当てていきたいという霧島市の意向に対し、伝道師からは「ふるきよき地方ライフの体験」など、他地区にはない霧島地域の魅力をより鮮明に打ち出すことなどを目標として打ち立て、これを霧島市全域や環霧島関係市町村に波及させていくことを志向すべきとのアドバイスがされた。 ○ また、当該調査の枠にとどまらず、伝道師と市担当者が直接的なつながりを持つことができ、雑誌やインターネット等といったメディアによる霧島市の紹介も積極的に実施し、肥薩線の記念シンポジウムにおいても伝道師より貴重な意見・アドバイスを得ることができた。 ○ 一方で、当該地域はH22年度「地方の元気再生事業」へ応募することを前提に調査を実施したところであるが、当該事業自体がH21年度で打ち切られてしまったため、現時点において具体的支援をどのように講じていくかは確定していない。 ○ このため、H22年度においては、引き続き肥薩線沿線を核とした霧島市の観光振興を支える人材育成等について、そのボトルネック解消等を含めた継続的なフォローを行う予定である。 		
奏功 した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観光や人づくりの実績を持つ伝道師の助言により、当該施策の振興についても、行政主体ではなく、地域主体としていくことが有効であること、ボランティアのみに頼るのではなく、利益を生み出す取組とすることが人づくりにもつながること、明確な目標、方向性を明らかにし、地域が主体となる具体策を練ることが必要であることについて、関係者の意識共有が図られた。 ○ コンセプトの提案や人づくりの必要性が明確になり、官と民の連携や民同士の連携していくことの必要性についても、関係者の理解を深めることができた。 		
反省 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体総括で述べたとおり、「地方の元気再生事業」の廃止により、H22年度からの支援事業等が未定の状態にある。 ○ 今年度の取組では、行政担当者については意見や構想、問題意識について伺い、伝道師との十分な意見交換により、今後の方向性まで明らかにすることはできたが、実際に地域の中で観光振興等に取り組まれている方々に対しては事例把握にとどまり、直接の意見交換や伝道師からのアドバイスを獲得する段階にまで至らなかった。 		
今後 のフ ォ ロ ー ア ッ プ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥薩線沿線地域を核とした取組の進め方、「700万人温泉入浴作戦」というキャッチフレーズに代表される霧島市全体の今後の観光・地域振興のあり方については、今年度の調査により、関係者の意識統一が図られ、人材育成のための明確なコンセプト、目標を掲げることができた。 ○ 次年度においては、引き続き現地での観光振興に携わるグループの代表等関係者との意見交換等を進め、今後の霧島市の振興に資する補助事業等、各種支援措置の検討、ボトルネック解消のために新たに国等が講ずべき規制改革等の措置について、伝道師とともに明らかにしていくことが重要と考える。 		